早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University

NEWS LETTER 13

March 2023 Number

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表　岡室 美奈子

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度より文部科学省から認定を受けた共同利用・共同研究拠点として活動を発展させてきました。本拠点の特色は、100万点を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であることを活かし、演劇博物館の収蔵資料のうち充分に学術利用がなされていない貴重な未公開資料・非公開資料を共同研究に供することにあります。3度目の認定を受けた現在は、演劇博物館のデジタルアーカイブの実績を活かし、デジタルデータやオンラインツールを複合的に活用した新たな共同研究を推進しています。

本拠点では演劇博物館の所蔵資料を対象とする共同研究として「テーマ研究」「公募研究」「奨励研究」の3種の研究が行われています。2022年度は、2年間認められている共同研究チームの活動初年度にあたり、テーマ研究3件、公募研究5件の共同研究チームが研究活動をスタートさせました。本拠点が研究テーマを提案する「テーマ研究」では、別役実旧蔵草稿資料、倉林誠一郎旧蔵資料、および映画館チラシを対象とする3つの共同研究チームを採択しました。また、演劇博物館の貴重な資料を研究対象とする共同研究課題を全国から募集する「公募研究」では、江口博旧蔵資料、二代目市川團十郎栢莚日記、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（ダイザー・コレクション）、栗原重一旧蔵楽譜、常磐津節正本板木を対象とする5件の共同研究チームを採択しました。さらに、演劇博物館の研究者が将来の共同研究に向けて演劇・映像資料の調査を行う「奨励研究」では、新たに6件の研究課題を採択、多岐にわたる演劇博物館の所蔵資料の調査・考証が進められ、その成果の一部は演劇博物館の企画展や特別展、所属学会などで発表されました。

サイレント映画「雷門大火 血染の纏」の上映中の様子
Screening the silent movie
Kaminarimon Taika Chizome no matoi

こうした共同研究に加え、2020年からのコロナ禍の国内外の演劇の動向を調査した「特別テーマ研究」の成果を発展させる新たな取り組みに着手しました。7月には、首都圏の劇場の関係者をお招きし、演劇資料の保存収集に関する課題を広く共有するシンポジウムを開催しました。また、8月には、ソウル市ミュージカル団、本多劇場の代表をお招きした日韓オンライン国際シンポジウムを開催し、演劇の場としての「劇場」のあり方について議論しました。11月には英国ナショナル・シアター、松竹株式会社の配信責任者をお招きし、演劇と映像配信について議論する日英国際オンラインシンポジウムを開催しました。

さらに、本拠点は国内外の研究機関との連携事業や資料のデジタルデータを活用した共同研究の開拓事業も進めています。凸版印刷株式会社と2016年から進めている「くずし字OCR」事業では、カリフォルニア大学ロサンゼルス校やお茶の水女子大学とともに、これまでの浄瑠璃丸本に加えて歌舞伎台本を新たな対象資料とした国際ワークショップを実施しました。また、デジタル化した資料利活用方法の可能性を広げる取り組みとして、歌舞伎俳優の中村京蔵氏らの協力の下、100年前に行われていた歌舞伎の慣習や伝統に則ったサイレント映画上映の「再現」を試みました。

コロナ禍終息の兆しはいまだ見えませんが、本拠点はさまざまな制約の中で、みなさまのご協力のおかげで充実した活動を展開することができました。今後も、演劇博物館が所蔵する豊かな研究資源とデジタル技術を活用し、国内外の研究機関と連携した共同研究のハブとして活動して参ります。今後ともみなさまのご支援とご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

contents

■拠点代表あいさつ　1 p
■令和4（2022）年度　テーマ研究成果報告　2 p
■令和4（2022）年度　公募研究成果報告　5 p
■令和4（2022）年度　奨励研究・拠点主催事業成果報告　10 p
■2020年度～2022年度外部評価　13 p
■Mission and Vision　16 p
■Report on Principal research, fiscal 2022　17 p
■Report on Selected research, fiscal 2022　20 p
■Encouragement research/ Projects organized by the center, fiscal 2022　25 p
■AY2020-AY2022 External Evaluation　30 p

○テーマ研究
テーマ研究は本拠点が提案したテーマに関する共同研究プロジェクトで、研究者の参加を広く呼び掛けるものです。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は年度開始時点のものです。

テーマ研究 1

別役実草稿研究

研究代表者：梅山いつき（近畿大学文芸学部准教授）
研究分担者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授、演劇博物館館長）、宮本啓子（白百合女子大学非常勤講師、尚美学園大学非常勤講師）

【研究目的】

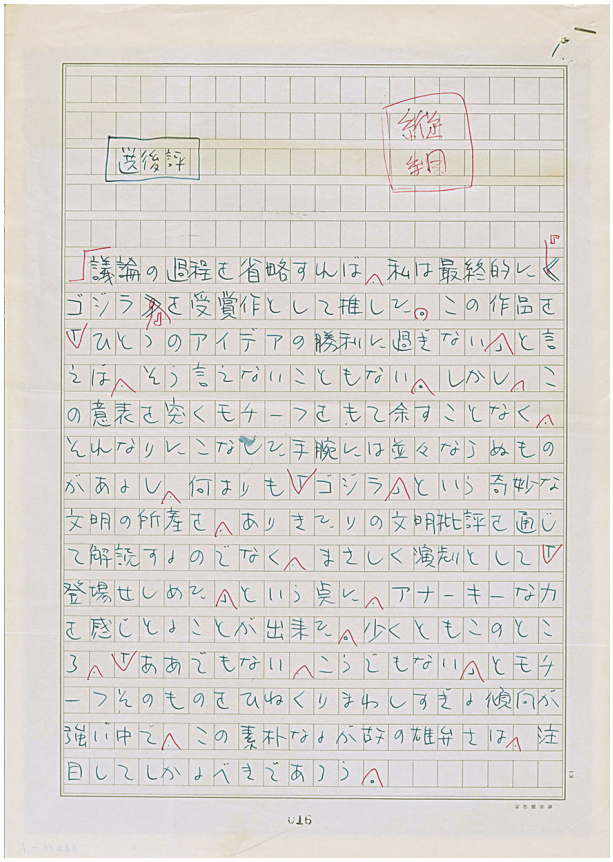
本研究は、別役実家から寄贈された資料および、演劇博物館が所蔵している別役作品に関連する資料の調査を通して、別役の劇文体、および劇作品における人物表象について検証するものである。2020年度に採択された同名のテーマ研究では、初期作品に関わる資料を調査した。調査から沈黙、貧困、憎悪、自己犠牲といった別役作品の根幹を読み解く上で重要なキーワードが浮上した。また、宮沢賢治や深沢七郎等の演劇以外の文学への関心が劇文体の形成に少なからぬ影響を及ぼしていることもわかった。そこで、2022年度以降の研究では1970年代以降の作風の変遷を整理すると共に、宮沢や深沢などの文芸作品や童謡、古歌への関心がどのように創作に反映されていったのかも明らかすべく、調査を進めている。

【研究成果の概要】

今年度は主に未整理資料の調査と、初期作品の特徴が70年代以降、どのように変化していったのかについて調査した。まず、演劇博物館の博物係の協力によって、全ての資料の目録化が完了した。目録のレコード件数は約2300件に上った。自筆原稿が最も多く、全体の73パーセントを占める。自筆原稿の内訳はエッセイや評論が57パーセントと最も多く、次いで演劇関係が30パーセントを占める。タイトルを特定できなかった原稿が7パーセントあり、タイトルを特定できたものの、バラバラの状態で発見された原稿もある。そこで、今年度はさらに調査を必要とする原稿を撮影し、チーム内で考証作業を進めている。また、今年度、出版社から寄贈を受けた別役の自筆原稿も撮影し、単行本に収録されていないものがないか調査している。

作風の変遷については、梅山が研究成果を論文としてまとめ、『演劇研究』に投稿した。本稿では、まず、これまでのテーマ研究で進めてきた「ホクロ・ソーセーヂ」の草稿分析を踏まえ、「憎悪」の感情が別役の創作の原点にあったことを指摘した。本作には「町」という共同体が、住人に対する憎悪を暴力によって露わにしている。本稿では、初期代表作である『象』と『赤い鳥の居る風景』を取り上げ、共同体の暴力性が優しさや思いやりに変容していることを論じた。また、70年代の作品として、『そよそよ族の叛乱』における共同体と個人の関係性に注目し、共同体の変容は不可視の差別構造に対する憎しみを描くことから、構造の仕組みを暴くことへと別役の関心が変化したことの表れとして捉えられると結論づけた。

以上、資料の全体像が明らかになったことと、これまで進めてきた初期作品に関する研究成果を論文としてまとめたことが今年度の研究成果と言える。一方、文芸作品や童謡、古歌が別役に与えた影響についての調査を十分進展させることができなかったため、次年度の課題としたい。



1988年第32回岸田國士戯曲賞選評［66211］
Selection Review on the 32nd Kishida Kunio Drama Award, 1988

テーマ研究 2

倉林誠一郎旧蔵資料の調査研究

研究代表者：後藤隆基（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター助教）
研究分担者：神山 彰（明治大学文学部名誉教授）、米屋尚子（文化政策・芸術運営アドバイザー）

【研究目的】

敗戦直後の1946年に俳優座に入団した倉林誠一郎（1912〜2000）は、56年に俳優座劇場を設立し、81年に代表取締役に就任した。また、65年には日本初の芸能実演家の統一団体である日本芸能実演家団体協議会（芸団協）の設立に参画し、舞台芸術における実演家の権利保護や文化活動の支援、政策提言等に多大な影響を及ぼした。本研究では、従来未整理・未公開であった倉林の旧蔵資料の調査・考証を通して、演劇制作者としての倉林の再評価を行い、戦後演劇の基礎的研究のための基盤形成を図る。

【研究成果の概要】

本年度は、厖大な資料群の収められている段ボール箱を一箱ずつ開梱し、中身の確認・整理・調査をおこなうところから作業にあたった。具体的な調査のために、藤谷桂子、三好珠貴、佐久間慧（以上、研究協力者）の助力を得て、資料の性質ごとに整理と分類、登録を進め、目録作成を開始した。

多岐にわたる未整理資料を順次確認したが、とくに以下の資料を選定し、整理・調査に着手した。

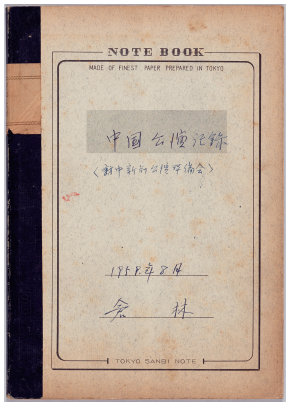
①訪中新劇公演関係資料：文学座、民芸、東京芸術座、ぶどうの会、俳優座による訪中新劇公演（1960年）にかんする資料であり、倉林の手になる記録の他、団長を務めた村山知義作『海の幸』（梗概）の自筆原稿、現地演劇関係者との座談会の速記メモ等、多様な公演関係資料が発見された。これらの調査を進め、訪中新劇公演の内実と意義を検討することを企図している。

②瑞穂劇団日誌：戦時下における移動演劇隊「瑞穂劇団」（農文協）の興行にかかわる日誌であり、倉林はその事務担当者として巡業にも帯同していた。本資料を通して、戦時下の移動演劇（隊）の日常や巡業先での行動、公演内容やその反響等が鮮明になる。他の移動演劇隊の記録と照合することで、その総体を考察する重要な足がかりとなるだろう。

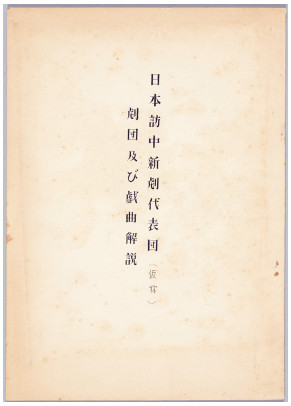
研究成果としては、倉林誠一郎の旧蔵書や関連文献等をもとに、研究の基盤となるべき倉林の事績に関する調査をおこない、後藤隆基が「倉林誠一郎研究序説——制作者がみた新劇史に関する予備的考察」（『立教大学日本学研究所年報』第21号、2022年8月）を発表した。演劇制作者という視座から新劇史の検討をおこなう目的の下、倉林がのこした文業の評価、興行史における制作者の位置づけ、先行研究史の整理をふまえて、俳優座入団以前の倉林の履歴に焦点をあてたものである。倉林がいかにして制作者となったか、倉林と演劇（新劇）との邂逅について整理し、倉林研究および戦後新劇史研究のための基盤形成を図った。

くわえて、倉林が長年、芸団協において数々の政策提言等をおこなってきたことに鑑み、2022年が劇場法施行10年にあたることから、倉林の事績から現代的課題に接続しうる道を講究すべく、シンポジウム「劇場法は何をもたらしたのか——施行10年とコロナ禍の3年」（立教大学、2022年9月2日）を開催した。高萩宏氏（世田谷パブリックシアター館長）、宮城聰氏（SPAC芸術総監督）、内野儀氏（学習院女子大学教授）、米屋尚子氏（本プロジェクト研究分担者）、内田洋一氏（文化ジャーナリスト）にご登壇いただき、後藤がコーディネートと全体進行を務めた。現代の現場の視点から遡行する形で倉林の思考を探索することもめざした。

今後は、前述した①②の資料群の精査により、それぞれの実態を明らかにするとともに、他の資料の発掘と調査によって、倉林の事績と戦後新劇の動態を講究していきたい。



倉林誠一郎「中国公演記録〈訪中新劇公演準備会〉」1958年9月［66267］
Kurabayashi Seiichiro, “Record of the China performances [Preparative Committee for the *Shingeki* China Performances],” September 1958



日本訪中新劇代表団（仮称）／劇団及び戯曲解説［66272］
Japan *Shingeki* Representatives to China (tentative name)/ Discussion of the theater company and the plays

テーマ研究 3

「映画館チラシ」を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究

研究代表者：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）
研究分担者：紙屋牧子（武蔵野美術大学非常勤講師）、柴田康太郎（日本学術振興会特別研究員PD）

【研究目的】

近年、映画興行の視点から映画史を捉え直す研究が国内外で進められている。しかしライブ性を伴う無声期については未だ十分に歴史化されているとは言い難い状況をふまえ、本研究は演劇博物館所蔵の映画館チラシの目録化・分析を通じ、映画興行の実証的な調査研究をおこなう。また2020～2021年度の公募研究における東京都市部の映画館に関する調査研究をより発展させるものとして、新たに東京と関西の映画館チラシを考察対象に加え、東西の映画興行に関する比較研究も目指す。

【研究成果の概要】

本年度は、2020年度から研究対象とする映画館チラシ約600点の更なる考証作業にくわえ、新たに東京の映画館チラシ93点、大阪の映画館チラシ137点の目録化作業を開始した。今後の利活用を考慮し紙面情報を詳らかに採録する方式を採用したため、多くの時間を費やすことになったが、目標とした第一段階の入力までは完了した。映画館チラシの全体像を把握するなかで、封切館との差別化を打ち出した宣伝方法（特に大阪の資料での）から映画上映以外の多彩な出し物まで、昭和初期の映画館の多彩な実態を捉えるのに格好の資料であり、無声からトーキーへ移行する時期の劇場のプログラムの変遷を捉えるためにも重要な資料群であることを確認した。

調査の成果公開としてはまず、2022年7月2日に表象文化論学会第16回大会（於東京都立大学）に研究分担者の柴田康太郎、紙屋牧子、研究協力者の白井史人（名古屋外国語大学）がパネル「大正期の映画／映画館のテクストとコンテクスト――映画宣伝資料」を組み、昨年度までの調査研究を発展させたテーマとして、東京における映画興行や映画配給構造の変容の考察、映画『五郎正宗孝子伝』（1915年）の間テクスト的考察、無声期のドイツ映画とその音楽の国内外における流通と聴覚的要素について各自発表したうえで、コメンテーターの上田学氏（神戸学院大学）や参加者と討議を行った。

年度末の2023年2月27日には、公募研究「栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究」（代表：中野正昭）との合同研究会（於名古屋外国語大学）を開催した。ここでは新規の考察対象とした地方の映画館興行も視野に入れたテーマで映画館と音楽等について多角的な議論を行ったうえで今後の課題も共有した。

また、本年度は映画関連資料の更なる研究活用について検討すべく2022年9月7日に研究会（於演劇博物館）を開催し、本地陽彦氏（日本映画史研究者）に「草創期の映画資料の収集と研究」というテーマで講演いただいた。講演後は本地氏のコレクション約数十点を実見しながら、草創期の映画宣伝資料の収集と活用に関する意見交換も行った。

八千代クラブのチラシ（1928年）［NFM601204］
Flyer of Yachiyo Club in 1928

東洋キネマのチラシ（1929年）［NFM600983］
Flyer of Toyo Kinema in 1929

○公募研究
公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は年度開始時点のものです。

公募研究 1

江口博旧蔵資料にみる戦時下から戦後の舞踊

研究代表者：宮川麻理子（立教大学現代心理学部映像身体学科助教）
研究分担者：北原まり子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、マエヴァ・ラモリエール（パリ第８大学博士課程）

【研究目的】

本研究は、「江口博旧蔵資料」（舞踊関係の写真・新聞記事スクラップを中心とする280点）を調査し、政治的変動が著しい昭和期を通じた日本の舞踊界の姿を描き出すことを目的とする。江口博（1903-1982）は、戦前から戦後にかけて半世紀にわたり舞踊批評を執筆し続けた。本資料の調査は、これまで著名な舞踊家を中心に描かれてきた日本の20世紀舞踊史に新たな視点を投じる契機となることが期待される。また本研究がとりわけ注目するのは、1930～40年代という戦中期の資料の充実である。この時期に、舞踊界の動きを広く克明に記していった江口資料によって、より詳細な舞踊界の変容を把握することができるであろう。

【研究成果の概要】

○本資料の特色

本資料は、江口博の手元に残された舞台写真、自身の書いた劇評に代表される新聞記事のスクラップ、そして公演パンフレット等の参考資料に大別される。江口は、1928年に国民新聞（のち東京新聞）の文化部に入社し、1930年頃から舞踊評を書き始めた。さらに舞踊の専門欄を持つ『音楽新聞』（1931年創刊）等にも活躍の場を拡げ、没する直前まで様々な定期刊行物、媒体に文章を書き続けた。江口の特殊性は、新聞社の社員として継続的・網羅的に舞踊を観、筆をふるったこと、その守備範囲がいわゆる「洋舞」から「邦舞」まで多岐にわたる点にある。

江口の活動は、舞踊評の執筆に留まらない。公演パンフレットへの寄稿、舞踊関係団体の顧問や要職、コンクールの審査員などを歴任し、有識者として文化庁や自治体の審議にも招かれた。舞踊芸術への総体的な貢献によって、1971年に紫綬褒章を受賞した。本資料からも、その活動の幅広さを伺うことができる。

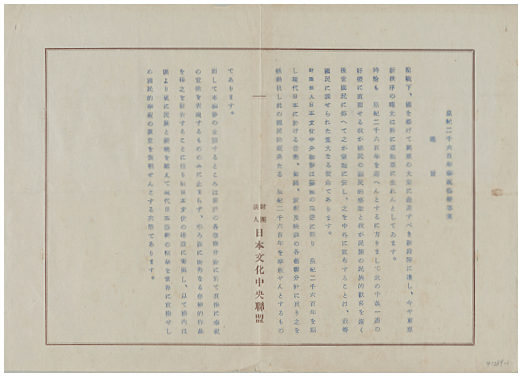
伊藤道郎資料［41282-001］
Ito Michio materials

○本年度の研究成果

初年度のため、江口博旧蔵資料の具体的な中身、及びその実態を把握することから研究を開始した。その過程で、前述のような資料の特色が改めて浮かび上がってきた。その中でも、江口の活動の長さと資料収集の几帳面さを象徴するのが、伊藤道郎についての新聞記事を収集したスクラップブックである。早くは大正６年に伊藤の海外での活躍を紹介する記事が見られ、戦前・戦後を挟んだ伊藤の活動の横顔を垣間見ることができる。本資料は、撮影及びデジタル化を行った。

また、同じく本年度デジタル化した資料には、日本文化中央聯盟皇紀二千六百年奉祝芸能事業に関する趣旨書き及びプログラム案、また演目選定（古典演劇）の報告がある。近年、戦時中の舞踊家たちの活動としてこのイベントはしばしば言及されているが、その概要を把握できる資料となっている。

以上の調査をもとに、目録の作成にも着手した。また2023年1月28日に、本年度のコレクション調査報告および研究成果発表を実施した。ここでは本資料と江口博についての概要を北原まり子が説明の上、戦時中の舞踊家の活動について宮川麻理子が報告し、マエヴァ・ラモリエールは女性ダンサーの身体とレビューについて提出間近の博士論文をもとに発表を行った。


日本文化中央聯盟皇紀二千六百年奉祝芸能事業趣旨［41289-001-001］
Japan Central Cultural League's 2600th Anniversary of Imperial Japan Celebration performance statement

公募研究
2

日記から考える歌舞伎役者を中心にした江戸中期の文芸圏研究

研究代表者：ビュールク・トーヴェ（埼玉大学人文社会科学研究科教授）
研究分担者：稲葉有祐（和光大学表現学部准教授）、日置貴之（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【研究目的】

本研究の目的は「二代目市川團十郎栢莚日記」（以下新出日記本『栢莚日記』）をもとに、①資料の所縁や信憑性について検討すること、②江戸中期の歌舞伎役者を中心として文芸園のあり方を明らかにすることである。『栢莚日記』は、日記本『柿表紙』とともに、狂歌師鹿都部真顔の医者とその息子に写されたもので、二代目團十郎の日記原本が文化初期に焼失された以後、江戸中期の歌舞伎役者の生活、また彼らをまつわる文芸園について記されている重要な資料である。本研究は、この日記本を出発点として、享保期の歌舞伎役者を取り巻く環境を明らかにし、歌舞伎役者や俳人・文人の関係を明らかにするものだ。

【研究成果の概要】

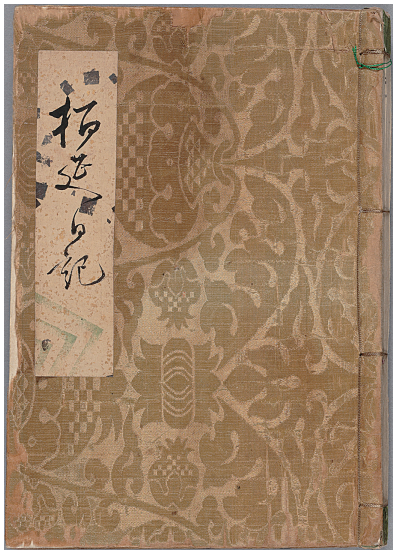
〇準備・資料収集

2022年度、主に資料収集を行なった。研究代表者及び分担者が『栢莚日記』、また伊原青々園が『栢莚遺筆集』（大正6〔1917〕年写）に記した日記本『柿表紙』および『栢莚日記』の注書き、さらに関連資料である、明和期の歌舞伎劇場関係者・歌舞伎役者・芝居茶屋・狂言作者・囃子方などを紹介する『明和妓鑑』（明和6〔1767〕年）及び寛政期の歌舞伎関係者の俳句及び代々の團十郎の業績を披露する『團十郎七世敵孫』（寛政12〔1800〕年）をデジタル化させ、画像データをもとの分析を開始した。

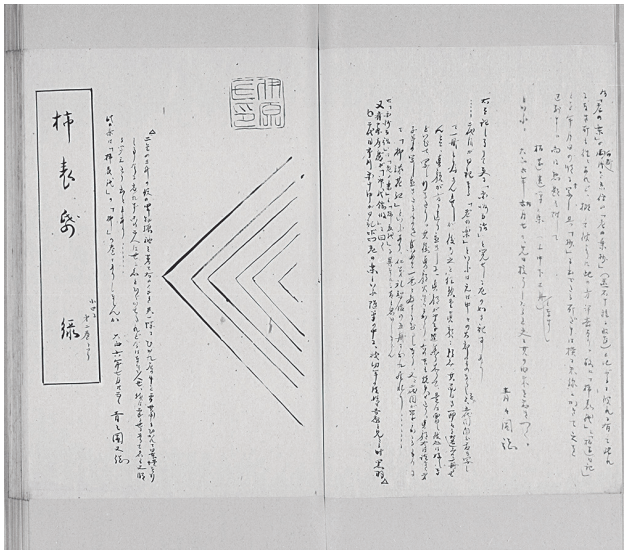
〇分析・研究

研究代表者ビュールクは上記の資料をもとに、二代目市川團十郎の日記諸本を注釈する研究シリーズ「二代目市川團十郎日記詳解―第六回―享保19（1734）年5月19日～29日」（埼玉大学（教養学部）紀要）で、二代目團十郎と河原崎座座元河原崎長十郎、中村座の木戸番里郷、市村座出演中の道化役者の初代鶴屋南北、葺屋町の芝居茶屋大黒屋久左衛門、本屋須原屋清二郎、絵師英一蝶などの文化的交流について分析した。この注釈シリーズは2014年から開始され、これから引き続き行うことによって、二代目團十郎の日記から享保期の文化交流の実態を明らかにする見込みがある。

2022年9月、研究分担者稲葉は、2代目團十郎の日記本を設立させ、江戸座の俳人と歌舞伎役者の交流についてさらに深く分析する準備を行なった。今後、本研究は日記本に加えて、俳書をとしても江戸中期の歌舞伎役者を中心にした文芸圏の実態を明らかにすることを試みる。



2015年新出日記本「二代目市川團十郎　栢莚日記」[43236]
Newly discovered (2015) diary
“Diary of Ichikawa Danjuro Hakuen II”



日記本「柿表紙」「栢莚日記」が書き写された「栢莚遺筆集」[113-00051]
Writings of Hakuen, including copies of the *Kakibyoshi* diary and *Hakuen* diary

公募研究 3

GHQ占領期における地域演劇の実証的研究——九州地区を中心に

研究代表者：小川史（横浜創英大学こども教育学部教授）
研究分担者：須川渡（福岡女学院大学人文学部准教授）、畑中小百合（大阪大学非常勤講師）

【研究目的】

本研究の目的は、敗戦直後に九州地区で行われた演劇、とりわけ、演劇を職業としない市民による演劇が、いかなる性格を持つものだったのかを明らかにすることにある。研究は、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（ダイザー・コレクション）の分析を通して行う。

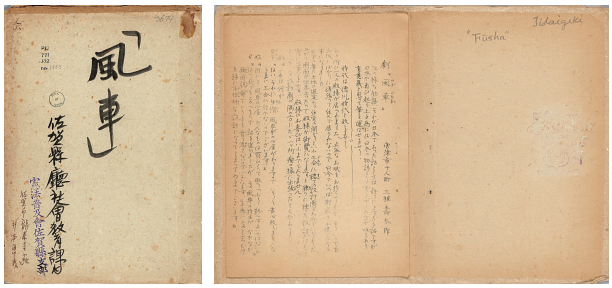
【研究成果の概要】

今年度はダイザーコレクションのなかから、109点の台本を閲覧し、重要と思われる資料のデジタル化をおこなった。調査研究に重点を置いた資料は、憲法普及会が関与した台本、熊本で活躍した劇団の台本、「狭客伝」「股旅物」ジャンルの台本である。

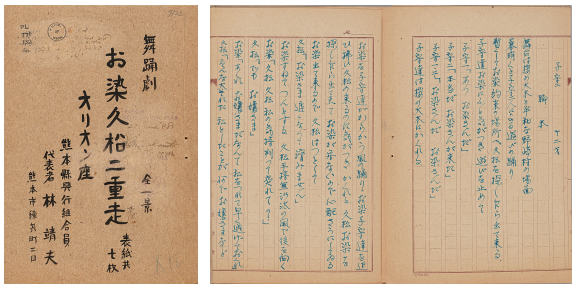
新憲法の理念を啓蒙するために結成された憲法普及会は、講習会、映画、幻灯、歌や踊りなどあらゆるメディアを総動員した大規模な活動を、1年間に亘り展開した。同会で演劇が活用された例はこれまで知られていなかったが、調査の結果、同会が関与した台本8点がダイザー・コレクションに含まれていることが判明した。これら台本の分析結果は、2022年9月18日に開催された日本社会教育学会第69回研究大会で報告を行った。分析した台本は、佐賀県のもの6点、山口県1点、福岡県1点である。いずれも、新憲法の理念や条文を具体的な場面に結びつけて演劇化したもので、いわゆる憲法劇の先駆的な試みとして評価できる。注目すべきは、作者や申請者として教員が関与していること、また、8点のうち4点がにわかの台本として書かれていることである。憲法の普及活動は、地域の人材や演劇文化を生かしながら進められたことがわかる。

熊本県の劇団では、戦後間もない頃に活動した三劇団、劇団文藝座（12点）、劇団オリオン座（6点）、日協劇団（7点）の上演台本に着目した。台本だけでは上演日時を特定できないが、緒方猪一『戦後の熊本演劇』（日本談義社、1983）、熊本の郷土雑誌・山口白陽編『呼ぶ』（呼ぶの会、1961-62）、『熊本日日新聞』（1946-47）を参照することで、劇団文藝座と劇団オリオン座の上演日程・演目の一部を特定することができた。『宇龍港』『弟子丸家の人々』『マテオ・ファルコネ』『灰燼』は劇団文藝座による1945年12月の旗揚げ公演と1946年4月の第二回公演において、『故郷の声』『お染久松二重走』は劇団オリオン座による1947年4月の旗揚げ公演において上演された演目であることが分かった。『お染久松二重走』は、本来は心中物で終わるはずのお染久松に「新時代の感覚」を取り入れ、道行はこれからの時代に合わないという理由でハッピーエンドに改変された喜劇的な舞踊劇である。戦後の熊本では、新劇だけでなく、当時の世相を反映した歌や踊りを交えたレビュー劇も上演されていたことが分かる。

戦前・戦後の大衆演劇の人気演目であった「侠客伝」「股旅」ジャンルの台本については、当時の上演台本がほとんど残っておらず、ダイザー・コレクションは大変貴重な資料である。本年度はタイトルから「女国定」「国定忠治」「森の石松」「瞼の母」のバリエーションと思われる作品を特定し、その内容の異同について分析を行った。



「風車」[GHQ03674]
『風車』台本。作者は唐津で教員をしていた人物。申請者は、戦中まで高等小学校の校長を務めていた地域の名士。
Kazaguruma [Windmill]
Script for *Kazaguruma*. The playwright was a teacher in Karatsu. The applicant was a local leader who had been the principal of a higher elementary school until the war.



「お染久松二重走」[GHQ07122]
1947年4月14日付『熊本日日新聞』によれば、『お染久松二重走』は台本に記載されている製作年の1948年より前に「追加演目」として上演されている。
O-some Hisamatsu Nijuso [Flight of O-some and Hisamatsu]
According to the April 14, 1947 *Kumamoto Nichinichi Shimbun*, this play was performed as an "additional production" earlier than the creation date of 1948 written on the script.

公募研究
4

栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究
――昭和初期の演劇・映画と音楽

研究代表者：中野正昭（淑徳大学人文学部教授）
研究分担者：白井史人（名古屋外国語大学世界教養学部准教授）、毛利眞人（音楽評論家、早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、山上揚平（東京大学教養教育高度化機構特任講師）、小島広之（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

【研究目的】

栗原重一（1897-1983）は昭和初期にエノケン楽団、松竹キネマ演芸部、さらにトーキー初期のPCL映画製作所などで活躍した音楽家である。本研究はその旧蔵楽譜の一部である「エノケン楽団・栗原重一旧蔵楽譜（約1000点）」の調査・分析を行う。2021年度までに実施した楽譜資料の基礎調査の成果を踏まえ、同時代の文献資料や、関連する楽譜コレクションの調査を組み合わせて研究を進める。栗原がともに活動した榎本健一（1904-1970）およびその周辺の楽士・楽団の活動実態の実証的研究を通して、広く同時代の演劇、音楽、映画を横断する興行や作品生成の過程を解明することを目指した。

【研究成果の概要】

○栗原旧蔵楽譜の目録と関連資料の調査

2021年度までに基礎的な情報を入力した約1000点の資料目録に関して、作曲者・編曲者、出典が明らかではない手稿譜などの情報に関して広い利活用へ向けたアップデートを進めた。また栗原重一と接点があった音楽家・篠原正雄（1894-1981）の旧蔵資料の基礎調査を継続し（台東区立下町風俗資料館所蔵）、栗原旧蔵楽譜と関連が深い資料を選定し、今後の体系的な比較調査の準備を完了させた。

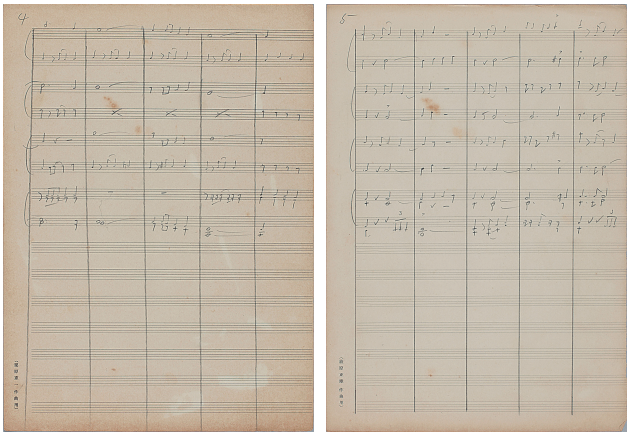
またエノケン楽団での活動以前の栗原の足跡に関して調査の進展があった。栗原が楽士として一時期活動していたと証言している名古屋の映画館・千歳劇場の資料の購入・調査を進めるとともに、演劇博物館がすでに所蔵していた当館のプログラム（70点程度）を精査し、初期の活動を明らかにする足掛かりを得た。

○関連する研究成果の発表と公開研究会の開催

2021年度に編集した成果報告冊子を活用し、音楽学、映像学の専門家との研究成果の共有と連携を進めた。研究代表者・中野（『ローシー・オペラと浅草オペラ』）と分担者・毛利（『SPレコード入門』）が関連領域における単著を刊行したほか、分担者・白井は国際音楽学会2022（於アテネ大学）において無声映画からトーキー初期の映画の音楽に関する研究発表を行った。

このようにして形成した研究ネットワークを活用し、2023年2月には、名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンターとの共催にて公開研究会を開催した。

本研究会は、テーマ研究「「映画館チラシ」を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究」との合同で、西洋音楽や映画文化の普及の多様な在り方を問うものとなった。とりわけ、栗原が所属していた「いとう呉服店少年音楽隊」の発祥の地である名古屋での西洋音楽受容を一つの切り口として、研究分担者・代表者が一同に会して成果報告と討議を行った。愛知県立芸術大学の七條めぐみ氏ら在名古屋の専門家や一般の研究者との意見交換を通じて、浅草やエノケンにとどまらない大正・昭和初期の音楽文化のなかで、栗原の活動を位置づける格好の機会となった。



「楽譜　團栗頓兵衛呼び込みの唄（原曲SON CUBANO RUMBA）」、手稿総譜［KRH47477］
使用五線紙：4頁「栗原重一作曲用」、5頁「篠原正雄作曲用」
“Sheet music: Calling Donguri Tombei (original piece: Son Cubano Rumba),” manuscript score
Staff paper used: page 4 “for Kurihara Shigekazu’s compositions,” page 5 “for Shinohara Masao’s compositions”

シンポジウム「モダン文化の〈場所〉」チラシ（2023年2月、名古屋外国語大学）
Flyer of the symposium in February 2023

公募研究 5

常磐津節正本板元坂川屋の出版活動

研究代表者：竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）
研究分担者：鈴木英一（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、常岡亮（常磐津協会理事）、阿部さとみ（武蔵野音楽大学非常勤講師）、前島美保（東京藝術大学非常勤講師）、重藤暁（江戸川大学非常勤講師）、小西志保（京都市立芸術大学共同研究員）

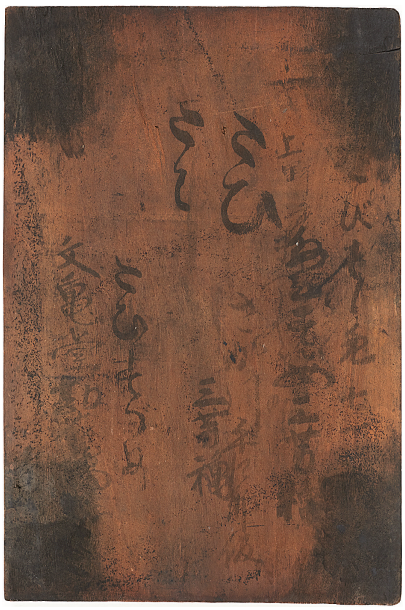
【研究目的】

坂川屋は、幕末の1860年に板株を常磐津正本板元の伊賀屋から受け継いで再刊を続け、以後昭和期まで新刊も行い、1987年頃まで板木で正本（稽古本）を刷り立てた板元である。この板元が旧蔵し演劇博物館に寄贈されて現存する板木、約800点の資料群が研究対象資料「坂川屋旧蔵常磐津節正本板木」である。当研究チームは、2020～2021年度に、これらの書誌的調査を進め、名題目録および本文板木1枚ごとの詳細目録を作成した。今年度は、題簽・奥付など付帯物の板木、板木の側面等を主な調査対象とし、それらに関する補遺目録を作成するとともに、坂川屋の出版活動をより多角的に概観するための調査研究を進める。

【研究成果の概要】

2022年度の主な研究成果は、上記の補遺目録作成のほか、常磐津正本板木と坂川屋の出版活動をテーマに主催したシンポジウム（公開研究会）「常磐津浄瑠璃本の板木研究をめぐって―演劇博物館所蔵坂川屋旧蔵資料より―」（11月26日、オンライン開催）である。シンポジウムの研究報告では、重藤が板木調査の現況と課題について概観し、鈴木が自身の坂川屋および板木との出会いから、板木が演劇博物館に収蔵されるに至る常磐津節関係者の事情と経緯について証言した。また、竹内は実際に刊行された稽古本諸本と板木との関係を把握して示す事例を、常岡・小西は近現代の坂川屋代々に関する実演家の見聞等を紹介した。さらに、ゲスト講演者2名（永井一彰氏、金子貴昭氏）が、明治期の板木と版権について、板本・版画の板木に関する先行研究からみた坂川屋旧蔵板木の特性について講演を行い、学術研究資料としての坂川屋板木の存在意義と重要性があらためて示された。質疑応答では、阿部・前島を中心に、坂川屋の出版活動と板木に関し、様々な観点からの意見が交わされた。

坂川屋については、幕末成立の『諸問屋名前帳』に伊賀屋勘右衛門から坂川屋へ板株を譲渡された記録（竹内の先行研究、1996年）、1927年刊の芸能名鑑『現代音楽大観』に当時の坂川屋主人の経歴書が残るが、刷られた常磐津正本とそれらの現存板木を除くと、坂川屋の代々とその出版活動を直接的に書き留めた資料は乏しい。今回のシンポジウムでは新たに、明治初期の代替わりと後継者に関する情報を含む新聞記事、昭和50～60年代の最晩年の坂川屋に関する実演家の見聞と記憶、親族の写真の存在などを提示することができたが、いまだ点と点を結びつけ全体像を把握するには至っていない。引き続き、代替わりの時期の特定、代々の当主と従業員の動向、常磐津正本出版の盛衰状況等について、情報収集と調査研究を進めていきたい。



何も彫られていない面の調査も重要である。写真は、常磐津稽古本「旅雀三芳穐」（本文板木４枚、７行７丁本、弘化４年（1847）９月河原崎座初演の現行曲）の終丁板木の裏面。坂川旧蔵板木は、板木の両面から２丁を刷り出すことができる２丁掛けで構成されるが、丁数配分の都合で、片面が彫られていない板木も存在する。彫られていない面には、しばしば文字が書き込まれ、これらも板木研究にとって貴重な資料となる。ここに見える文字は、名題に関する「たびすゝめ」「三芳穐」、板元名に関する「さか川平四郎板」「文亀堂勘右衛門」、そのほか「七丁」「上り」といった書き込みもあり、長い間に随時書き継がれたと見受ける。文亀堂は坂川屋が板株を譲り受けた伊賀屋勘右衛門の屋号。四隅の墨の汚れは、他にも同様の板木が散見され、刷り立て作業の実情を解明する手がかりとなり得る。2021年度拠点研究により撮影。[29888-169 (08-11)]

Investigation of the unengraved sides is also important. The photo shows the back of the last woodblock of the *Tabisuzume miyoshi no irodoki* rehearsal book (four text woodblocks, 7 lines, 7 sets; performed at the first Kawarazaki-za performance in September 1847). The Sakagawa woodblock holdings are composed of *nichogake* blocks enabling two-set printing; because of the number of blocks, some have engraving only on one side. The unengraved sides often have writing, which is also valuable for woodblock research. The text visible here is related to the title or to the printer; it is thought to have been used for notes as needed over many years. The ink stains at the corners are visible on a few other woodblocks as well, serving as hints to the actual printing process. Photographed in AY2021 during Centre research.

奨励研究

本拠点では2020年度より演劇博物館の若手研究者を中心に今後の本拠点の共同研究の基礎調査を行う「奨励研究」を開始しました。2022年度も6件の研究課題が採択され、多彩な研究が行われました。

2022年度の研究課題として①「人形浄瑠璃文楽の図像・音声・映像資料の調査研究」（原田真澄）、②「演劇博物館所蔵落語・講談関連資料の調査研究――田邉孝治旧蔵資料を中心に」（赤井紀美）、③「日英の女性劇作家・翻訳家たち―― 16世紀中頃から21世紀まで」（石渕理恵子）、④「日本小劇場演劇関連資料調査及びその活用方法研究――太田省吾と佐藤信を中心に」（金潤貞）、⑤「外国映画パンフレットの調査と研究」（川﨑佳哉）、⑥「撮影所システム衰退期の日本映画における性表象に関する基礎研究」（鳩飼未緒）の6件が採択された。各研究課題が学内外の研究者等と協力しながら、多岐にわたる膨大な演劇博物館の資料の調査・考証を進めた。成果の一部は演劇博物館の秋季特別展「Words, words, words. ――松岡和子とシェイクスピア劇翻訳」、秋季企画展「村上春樹　映画の旅」などで発表された。また、①の研究成果は歌舞伎学会2022年度秋季大会で広く紹介され、演劇博物館春季企画展「近松半二――奇才の浄瑠璃作者」における成果と併せて今年度の歌舞伎学会奨励賞を受賞した。

拠点主催事業

本拠点では2020年度からのコロナ禍の演劇の動向を調査してきた特別テーマ研究の成果を発展させるとともに、広く国内外の演劇、芸術、社会の動向のなかで新たな議論につなげる取り組みに着手しました。また、国内外の研究機関との連携事業および資料のデジタルデータを活用した共同研究の開拓事業を進めました。

コロナ禍の演劇に関する共同研究事業

2020年度～2021年度のコロナ禍の国内外の演劇の動向を調査した特別テーマ研究の成果を踏まえ、2022年度はこれをさらに現代の国内外の演劇、芸術、社会の動向と広く関連づけ、多角的に議論する取り組みに着手した。昨年度末には大阪市立吹田資料館、および北海道の浦幌町立博物館の関係者をお招きし、オンラインシンポジウム「コロナ禍と博物館の二年――資料の収集・展示をめぐる課題と展望」（2022年3月7日）を開催した。これに続き、今年度は新国立劇場、東京芸術劇場、彩の国さいたま芸術劇場の関係者をお招きして「劇場・博物館における舞台芸術資料アーカイブの課題と展望」（7月21日、小野記念講堂）を開催し、コロナ禍によって顕在化した演劇資料の保存収集に関する課題を広く共有した。12月にはその続編として、演劇にかかわるチラシやポスター、チケット、フリーペーパーなどの紙媒体資料の現物制作・保存等の意義について、ウェブでの広報や情報発信等が進むなか冊子やチラシをつくり続けておられる企業の取り組みについてお話をうかがい、今後の課題を議論する非公開の座談会を開催した（12月21日、演劇映像学連携研究拠点）。本シンポジウムおよび座談会の内容は今年度末までに成果報告冊子にまとめる予定である。

また、ソウル市ミュージカル団、本多劇場の代表者をお招きし、日韓両国の状況を共有・比較しながら私たちが迎えつつあるポストコロナの時代における演劇の場としての「劇場」のあり方について議論する日韓国際オンラインシンポジウム「ポストコロナ時代の劇場――未来の劇場のために」（8月30日）、およびコロナ禍により需要が高まった演劇の映像配信をテーマに、英国ナショナル・シアター、松竹株式会社の配信責任者をお招きし、日英国際オンラインシンポジウム「演劇と映像配信の未来を考える――英国ナショナル・シアターと松竹の事例から」（11月30日）を開催した。これらの国際シンポジウムの記録は、それぞれ日韓、日英2ヶ国語の成果報告冊子としてまとめ、当日の映像は日本語、韓国語（あるいは英語）、および発表者オリジナルの言語を用いた3パターンの映像で広く公開した（シンポジウムの報告は11～12頁を参照）。

また、演劇博物館2021年度春季企画展「Lost in Pandemic ――失われた演劇と新たな表現の地平」図録、および『エンパクブック』118号に掲載された「新型コロナウイルスと演劇年表」を、「新型コロナウイルスと演劇年表データベース」として2022年11月に早稲田大学文化資源データベースで公開した。現在も未だ収束していないコロナ禍の演劇動向は継続して調査を進め、現在公開している2022年2月24日以後の情報については随時更新して公開する予定である。

コロナ関連シンポジウム開催報告

シンポジウム「劇場・博物館における舞台芸術資料アーカイブの課題と展望」
座談会「演劇を「紙」で記録すること」

舞台芸術という一回性の表現をいかに記録にのこし、チラシ、ポスター、プログラム、台本など公演をめぐる資料をいかに保存、継承していくか。ことに近年、舞台芸術界にとって喫緊の課題として共有されてきたテーマである。むろん、以前から議論されてはいたが、2020年から続くコロナ禍によって（デジタルも含めた）アーカイブの重要性がより鮮明にあぶり出される状況にいたったのは周知であろう。

そうした問題意識のもと、演劇映像学連携研究拠点の主催事業として、舞台芸術資料のアーカイブに関するシンポジウムと座談会をおこなった。

シンポジウム「劇場・博物館における舞台芸術資料アーカイブの課題と展望」（2020年7月21日、早稲田大学小野記念講堂、立教大学大衆文化研究センター共催）では、首都圏の主要な公共劇場でアーカイブに携わる方々にご参加いただき、各劇場がどのように公演記録を整理し、資料を保管しているのかについてお話を伺った。あわせて、演劇博物館の取り組みと図書室の機能についても紹介した。

登壇者は、星川哲也氏（新国立劇場運営財団事業開発主管）、前田圭蔵氏（東京芸術劇場事業企画課広報営業係長）、請川幸子氏（彩の国さいたま芸術劇場企画制作課副参事）、藤谷桂子（演劇博物館司書）、児玉竜一副館長。司会を後藤が務めた。

デジタルアーカイブが注目される昨今だが、とくに一次資料である紙資料を主な対象として、劇場や博物館に併設される図書室や資料室の存在意義にも焦点を当てた。それらをふまえ、個々の劇場や博物館だけでなく舞台芸術界全体でそれを実現するための課題や展望を共有すること、後世のために何ができるかの議論が展開された。

その成果を受けて、座談会「演劇を「紙」で記録すること」（12月21日、早稲田大学演劇博物館会議室）を実施した。出席者は、笹目浩之氏（株式会社ポスターハリス・カンパニー代表取締役）、緑川憲仁氏（株式会社ネビュラエンタープライズ代表取締役社長）、吉田祥二氏（ロングランプランニング株式会社取締役／『カンフェティ』編集長）、児玉副館長。司会を後藤が務めた。

ここでは、演劇にかかわるチラシやポスター、チケット、フリーペーパーなど、そのつど消費されていく「紙資料」の資料的価値、現物制作・保存等の意義について、コロナ禍の経験をふまえた議論をおこなった。

演劇博物館にとっては、長年包括的に舞台芸術関連資料を扱ってきた同館のアーカイブについて認識を新たにし、館外からの声を聞くことで演劇専門総合博物館としての役割と責任を見直す機会になったと思われる。館が外からどう見られているか。いかに期待され、信頼されているか。そうしたまなざしを意識することは館にかかわる人たちが等しく共有すべきでもあろう。

シンポジウムと座談会の記録は、報告書として公開を予定している。なお、登壇者および出席者の所属等は開催当時のものである。

（後藤隆基・立教大学大衆文化研究センター助教）

日韓国際オンラインシンポジウム
「ポストコロナ時代の劇場――未来の劇場のために」

早稲田大学演劇博物館では、2020年2月より、コロナ禍で中止及び延期された公演関連資料を収集し、オン・オフラインでの展示、そして2回にかけてコロナ禍での演劇について考えるシンポジウムを開いてきた。そのつづきとして、2022年8月30日（火）には、日韓国際オンラインシンポジウム「ポストコロナ時代の劇場――未来の劇場のために」を開催した。今回のシンポジウムでは、日本と、隣国の韓国から演劇関係者をお招きし、コロナ禍の3年目を迎える演劇の現場、その場としての「劇場」について議論を行った。今日の劇場が抱えている課題と展望を共有し、ポストコロナ時代を迎えている今、劇場のあり方について考える時間をもった。

前半では、四人の登壇者による各15分の発表が行われた。本多劇場グループ総支配人の本多愼一郎氏は、現在経営している九つの劇場を紹介し、それらの位置する下北沢と新宿という地域、住民と劇場の関係性、そしてコロナ禍であらためて確認された劇場運営ポリシーについて語った。それにつづき、ソウル市ミュージカル団団長のキム・ドクヒ氏は、2020年から韓国で公共劇場を中心に行われてきた公演の映像化事業を紹介し、それらの事例から浮かんできた今日の劇場の課題と可能性について説明した。劇作家・演出家の平田オリザ氏は、芸術の社会的役割をめぐって、劇場や教育の場を通した実践を説明し、これからのビジョンについて述べた。最後に、韓国芸術綜合学校演劇院教授のイ・ソンゴン氏は、「オンラインストリーミング公演と観客のライブネス経験を中心に」をテーマに、ライブネスの概念を多様な理論から検討した上で、三つのオンラインストリーミング公演の事例を通して、演劇におけるライブネス概念の変化および拡張の可能性を提示した。

後半のディスカションでは、日本と韓国の劇場が新型コロ

ナウイルス感染症の流行にいかに対応してきたのかという話をきっかけに、両国における文化芸術政策や助成事業の相違点について議論を行った。コロナ禍の状況だけではなく、より広い視野から各国の演劇界が振り返られた。質疑応答では、公演のオンライン配信の増加により変化しつつある観劇体験について、韓国の劇場と上演の事例などが紹介されつつ議論が交わされた。具体的な事例が挙げられることによって、変化の渦中にある劇場の実態が共有され、参加者全員にとって非常に有意義な時間となったと思われる。

（金潤貞・演劇博物館助手）

日英国際オンラインシンポジウム「演劇と映像配信の未来を考える――英国ナショナル・シアターと松竹の事例から」

2022年11月30日には、2020年度からの「コロナ禍における演劇に関する資料収集・調査事業」を発展させ、今年8月に開催した日韓オンラインシンポジウムの成果も踏まえて、日英国際オンラインシンポジウム「演劇と映像配信の未来を考える――英国ナショナル・シアターと松竹の事例から」を開催した。本シンポジウムでは、コロナ禍により一気に需要が高まった演劇の映像配信をテーマとして取り上げた。演劇の映像配信は、コロナ禍における生の舞台の「代替措置」とされることもあるが、本シンポジウムは、コロナ以前から配信に力を入れてきた英国ナショナル・シアターと松竹の舞台制作・興行現場の関係者、およびシェイクスピアや日本の古典芸能専門の研究者の方々をお招きし、日英の演劇の映像配信の事例、課題や展望を共有しながら、配信が果たす役割の変遷、配信と演劇の関係性、配信がもたらす観劇体験の変容などについて議論した。

前半は各登壇者が15分程度の発表を行った。英国ナショナル・シアターのデジタル部門副部長Flo Buckeridge氏は、コロナ以前・以後でナショナル・シアター・ライブ（NT Live）が果たした役割の変化や、コロナ禍における同劇場の取り組み等を紹介した。松竹株式会社演劇ライツ部部長の窪寺祐司氏は、コロナ禍における歌舞伎の舞台映像の配信や国内外の配信用コンテンツの作成等について、配信以前のシネマ歌舞伎やMETライブビューイングの事例、同企業が抱える収益性の課題等も踏まえて説明した。バーミンガム大学シェイクスピア研究所のDr. Erin Sullivanは、

シンポジウムでの議論の様子
Discussion at the Symposium

最新の編著書*Lockdown Shakespeare: New Evolutions in Performance and Adaptation*（2022）や*Shakespeare and Digital Performance in Practice*（2022）を紹介しつつ、シェイクスピア劇を中心とした英国の演劇の映像配信の現状について紹介した。東京大学大学院総合文化研究科教授の河合祥一郎氏は、これまでの日本の演劇配信の試みや、演劇の今後の新たな可能性について説明した。最後に早稲田大学文学学術院教授、同演劇博物館副館長の児玉竜一氏は、コロナ禍に当館で行った試み（JDTAやEPADに関わるもの）を踏まえて、日本の伝統演劇の配信活動を中心に紹介した。

後半のディスカッション及び質疑応答では、権利処理等の課題を共有しながら、配信と集客の関係、観劇体験における場の共有やコミュニティ感覚といったテーマを中心に、演劇の歴史を振り返りながらポストコロナ時代を見据えたその未来について活発な討議が行われた。

（石渕理恵子・演劇博物館助教）

くずし字判読支援事業

本拠点は、機能強化支援を受けた2016年以来、凸版印刷とともに「くずし字OCR」の構築を図る「くずし字判読支援事業」を進めている。2020年度からは、それまでの成果として蓄積されたくずし字字形データと、凸版印刷が開発したオンライン翻刻支援システムを組み合わせた教育事業に着手し、ワークショップを行っている。2022年度は、昨年度に続き早稲田大学、お茶の水女子大学、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校の研究者、大学院生を対象にした国際ワークショップを開催した。今年度はこれまでの浄瑠璃丸本に加えて新たに歌舞伎台本「東海道四谷怪談」を新たな対象資料をとし、「くずし字OCR」を翻刻補助ツールとして活用しながら、オンライン会議ツールを用いた日本の古典演劇資料の共同翻刻、およびこれを土台とした国際的研究交流の可能性を開拓した。

さらに、2016年度から2019年度に進めた「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースの構築事業の継続事業として、浄瑠璃丸本「菅原伝授手習鑑」を対象に、約4万4千字からなる字形データセットを作成した。完成した字形データセットは本事業の成果として今年度末に本拠点ウェブサイトに公開予定である。

演劇・映像資料の利活用を図る事業

本拠点では、演劇博物館の所蔵資料のデジタル化を積極的に進め、その資料の利活用方法の可能性を広げる取り組みを行っている。今年度は、演劇博物館の所蔵資料から戦後占領期の筋書、滝沢修、宮本研、小沢昭一らの音声・映像資料などを中心にデジタル化し、演劇・映像研究の環境整備を進めた。また過去にデジタル化したサイレント映画などの映像資料については、今年度も歴史研究の知見を踏まえた再上映を行っており、2020年度からは再上映の様子の記録映像を公開する取り組みも進めている。2022年度はサイレント映画『雷門大火 血染の纏』（1916年）を取り上げ、歌舞伎俳優の中村京蔵氏の語りや劇団新派邦楽部の堅田喜三代氏らの邦楽演奏により、100年前に行われていた歌舞伎の慣習や伝統に則った上映の「再現」を試みた。また、中村氏や堅田氏、活動写真弁士の片岡一郎氏、映画研究者の柴田康太郎氏（日本学術振興会特別研究員PD）、児玉竜一当拠点副代表によるトークも併せて収録した。成果は期間限定でオンライン公開し、国内外に広く成果を発信した。

2020年度～2022年度外部評価

早稲田大学演劇博物館　演劇映像学連携研究拠点では、3度目の認定を受けた2020（令和2）年度からの3年間の活動についての外部評価を3名の外部評価委員に行っていただきました。以下、それを全文掲載します。

外部評価委員　大阪大学大学院文学研究科教授　永田　靖

2020年度から2022年度というコロナ禍での拠点事業運営であったにもかかわらず、演劇映像学の連携拠点として最大限の努力をし、大きな研究成果をあげていることがわかる。いまや現代日本の演劇研究・映像研究になくてはならない拠点事業であると考えられる。

共同研究事業については、それぞれ独創的で価値の高い研究を推進しているように考えられる。テーマ研究、公募研究をはじめ、特別テーマ研究、奨励研究など研究形式に変化を付けて演劇映像研究の多元化に対応しようとしている姿勢も評価できる。また連携先も多岐に渉っており、拠点として中心的な研究事業となっていると考えられる。ただ、全体の限られた予算の中での事業展開であることは理解しているが、全体の保存資料の件数からみて、テーマ研究が1～3件というのは、いささか物足りない印象を与える。

主催事業も工夫を凝らした事業展開をしており、評価できる。項目として上がっている「演劇映像資料のデジタル化と多角的な資料公開」の項目が未記載のようであるが、成果概要では予想以上の成果をあげており、この点も高く評価できる。研究資料のデジタル化、データベースの公開などは現代では必須の事業となっているため、一層の展開を期待したい。ただし、コロナ禍での事業運営であったためと思われるが、海外の研究機関との連携は必ずしも進んでいないように見える。

運営体制についても、安定的な構造を構築しており、拠点組織として不安材料はないように思われる。ただ大学全体の中での位置づけはどのようになっているのか、貴大学には演劇を研究する相当数の研究者が在職しているのではないかと予想するが、もしもそうであれば、より強力な全学との連携や全学的なバックアップも可能になるのではないかと考えられる。

広報活動については、非常に積極的になされており、評価できる。ただ東京以外の地域では、拠点の事業内容が東京在住の研究者・市民ほどには身近に感じられるとは言いがたいと思われる。博物館の使命は、保存資料の公開が第1であり、研究者・市民が自由にアクセスできるオープンな環境整備が望まれる。東京以外の地域の研究者・市民も含め、いっそう自由に活用できるような環境の整備をさらに期待したい。

外部評価委員　明治学院大学文学部芸術学科教授　斉藤　綾子

アジアで唯一の演劇映像専門の博物館として早稲田大学演劇博物館は、2009年に文部科学省により「共同利用・共同研究拠点」としての認定を受けて以来、3度目の認定更新を受けている。今回の外部評価は2020年から6年間の事業展開における中間報告という位置づけになる。同館における拠点事業の目的は大きく2つあり、1つは研究事業として館の所蔵資料の研究活用と公共共有化を奨励・促進することで学術的に貢献し、社会に発信すること、2つ目は主催事業として、館の豊富な資料のうち未発表資料を公開に向けて整理し、学外の研究者にもアクセスできるようにすることで文化資源として活用を促進することである。また、共同研究を基盤とする研究事業は、館が指定する2年間のテーマ研究と公募研究、それに、館所属の若手研究者を奨励する1年間の奨励研究に分け、館の機能と活動の多面的な展開が可能になるように設定されている。

2020～21年はコロナ禍にあって行動制限がかかり、国際交流などを始めとして、当初計画した事業展開が困難になったに違いない。そうしたなかにおいても、コロナ禍における特殊な状況を記録・把握するため演劇動向調査を目的とした「特別テーマ研究」を設定したことは、館の拠点事業としてフレクシブルな活動態勢を示すものである。2020年3月にはオンラインシンポジウム「コロナ禍と博物館の2年――資料の収集・展示をめぐる課題と展望」も開催、継続した研究成果が2021年の企画展示「Lost inPandemic――失われた演劇と新たな表現の地平」展として結実し、パブリックに発信したのは、資料保存やアーカイブ拠点としての活動と同時に、アクチュアルな社会現実とも向き合う、生きる図書館として拠点事業に相応しい活動だと思われる。

研究事業は、従来の「テーマ研究」と「公募研究」に加え、2020年から館所属の若手研究者の研究を奨励する「奨励研究」を加えたことで、より広い幅の研究活動が担保されている。テーマ研究の「別役実草稿研究」は2019年に寄贈を受けた資料を検証するプロジェクトで、適切な時期を逃せば未整理のまま埋もれてしまう危険を考慮した賢明な判断だったと思われる。その成果は2021年の特別展「別役実のつくりかた」の実施だけでなく、動画配信や研究員の論文寄稿や学会発表などで着実に発信されている。2020年から始まった共同チームによる5件の「公募研究」のうち公募研究1「千田資料によるアーニー・パイル劇場の基礎研究―― 1946年から1948年までの伊藤道郎の舞踊実践とジャンルを越境した活動記録」（代表：串田紀代美・実践女子大学）は占領期における演劇・音楽・劇場の状況を調査する歴史的にも興味深いテーマであっただけに2020年度で終了したのは残念である（成果は代表者の論文投稿として公開された）。公募研究2「栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究――昭和初期の演劇・映画と音楽」（代表：中野正昭・明治大学）から5「坂川屋旧蔵常磐津節正本板木の基礎的研究」（代表：竹内有一・京都市立芸術大学）はどれも演劇、音楽、映画と分野を跨るユニークなテーマが設定され、江戸時代の資料から大正・昭和初期と時代的にも幅広く、資料自体も栗原重一旧蔵資料、無声映画期楽士の旧蔵資料であるヒラノ・コレクションによる楽譜資料から、興行に関わる映画館チラシ、そして役者絵本、板元坂川屋など館ならではの資料が、専門知識を有する研究代表者と適切な研究者が共同でそれぞれ活用されている。データベース作成、カタロギングなど資料整理だけでなく、その成果が企画展示、オンライン研究会、上映会やシンポジウム開催やそのオンライン配信、そして研究者による論文発表や単著出版というさまざまな形で発信、共有され、順調な進捗状況である。

「奨励研究」は基本的に館所属の研究員による個人研究を奨励するものであり、公共的・社会的な目的というよりは、将来的な研究者育成を援助する活動だと思われるが、予算執行状況とも鑑みると、将来的には出版助成なども含めて予算配分などは検討の余地があるように思われる。

拠点事業の連携と共同研究という点に関して、共同研究に携わる研究者には現在は他機関に所属していても、元は館の助手であったり、過去に館内における研究に関わっていた研究者の場合も見受けられ、また研究成果がやや個人の業績にどのように反映されているのか判断が難しい例も散見される。館所蔵の資料自体の学術研究的な調査には専門知識が必要不可欠であり、また2年間に跨がる円滑かつ効率的な研究遂行のためにはチームのメンバーがある程度限定されるのは致し方なく、また個人の業績として発信・公表されること自体は歓迎すべきではあるが、「共同利用・共同研究拠点」という拠点事業の使命からすると、国内外により広く多様な研究者による積極的に関与が可能になる新たな連携やネットワークの模索など若干の検討の余地はあるのではないかと思われた。

総合的に見ると、館長と研究員を始めとする館の学術的コミュニティが有効に機能し、拠点事業の活発な活動を支え、その成果は概ね適切、かつ期待通りに推移していると考えられ、継続して今期の充実した展開を期待したい。

外部評価委員　テルアビブ大学芸術学部演劇学科・人文学部東アジア学科名誉教授　ツヴィカ・セルペル

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2020年から2022年にかけての新型コロナウイルス感染拡大の最も困難な時期の活動において、様々な面で素晴らしい成果を挙げている。

1. パンデミックとの遭遇

連携研究拠点によるパンデミックが引き起こした複雑な状況への迅速な適応と優れた新しい運用方法の発案は注目に値する。研究チームは演劇博物館所蔵のまだ一般公開されていないデジタル資料を使用し、対面での共同研究からオンラインへ移行することでプロジェクトを継続し、研究を遂行することができた。連携研究拠点はパンデミックによる課題に即座に対応し、その研究対象への多大な影響を研究する「特別テーマ研究」のプラットフォームを展開した。研究チームは日本の劇場、博物館、美術館などとヨーロッパと米国の舞台芸術の機関における2020年から2022年までのコロナ禍における規制の調査を実施した。この極めて興味深い調査は、2020年の歌舞伎の公演全面禁止から、2022年の歌舞伎座の掛け声禁止などのこの3年間における特徴と範囲の異なる様々な規制を表している。連携研究拠点はCOVID-19の日本の演劇における長期的な変化や影響の研究を推進するだろうか。パンデミックによってこれからどのような変化や展開が起こるのだろうか。演劇博物館所蔵の資料の歴史的価値に加え、この3年間の調査は今後の重要な研究の基礎として必ず貢献するだろう。

2. 研究戦略

連携研究拠点は効果的で有益な二つの研究プラットフォームを作成した。最初のプラットフォームには、演劇博物館や日本の他の多くの機関の熟練の研究者が主導して実施する主要な研究と特別な研究が含まれている。ここではその研究プロジェクトの中から幾つかの優れた例を紹介する。このプラットフォームは、より広範囲のデータコーパスから一つの要素を選択し、それに焦点を当てた極めて異例な研究テーマを発案している。研究チームの一つは千田是也コレクション所蔵のアーニー・パイル劇場（東京宝塚劇場）における1946年から1948年までの伊藤道郎による舞踊練習とジャンルを超えた公演の記録の基礎的研究である。ここでは「新劇」の中心人物であった千田是也の長兄、伊藤道郎の並外れた人物像とその活動に焦点を当てている。伊藤道郎はアイルランドの詩人で劇作家のW.B.イェイツに影響を与えた国際的なダンサー、振付家、演出家であり、ヨーロッパ、ニューヨークのブロードウェイ、カリフォルニアのハリウッドなどの舞台作品で東洋と西洋を融合させた。演劇博物館所蔵の千田是也コレクションの写真と並置された同じテーマのアメリカの資料の間には印象的な発見が見られる。もう一つのチームはコメディアン、監督、映画監督であるエノケン（榎本健一）を、エノケンの公演や映画音楽も作曲した音楽家・栗原重和の全作品の分析という枠組みで研究した。別のチームは映画のチラシなどの宣伝資料を調査し、大正から昭和初期にかけての無声映画の様々な側面を研究した。この極めて異例のデータを使用した研究は興味深い結果を出している。

二つ目のプラットフォームである演劇博物館の若い研究者によって実施された「奨励研究課題」では、演劇博物館のコレクションに必須の基礎研究を遂行した。研究者は演劇博物館に所蔵されている資料から、小劇場運動劇作家で演出家の太田省吾と佐藤信などの資料や、新派と浄瑠璃に関する資料などを調査し、その一貫した一つの主題に集中した調査は、演劇博物館のコレクションを拠点とした人、テーマ、ジャンルに関する今後の更なる研究のための確固たる基盤を構築した。この二つの異なった研究プラットフォームの組み合わせは、効果的で有意義なものであった。

3. デジタルデータの精緻化と拡張

近年の各分野におけるアーカイブ内の様々のデジタルデータの精緻化と拡張は極めて有益である。演劇の分野における「Japan Digital Theater Archives（JDTA）」と呼ばれるジャンルを超えた舞台芸術のメタデータの研究は、今後の日本演劇の多くの研究者に極めて重要なリソースである。著作権の問題などの障害はあるが、近い将来このプロジェクトが実現されることを願っている。映画の分野では演劇博物館に収蔵されているデジタル化された無声映画を活用し、映画のデジタル化されたバージョンの誤った編集を修正し、インタータイトルの欠落部分を補足し、映画の作成時のスタイルに弁士のナレーションと音楽を追加した。このユニークで創造的な研究とその作品により、無声映画の本質を実際に鑑賞して研究することが可能となった。

4. アーカイブと研究の相乗効果

演劇映像学連携研究拠点の活動で最も重要な側面は、アーカイブとしての演劇博物館との相乗効果である。その活動は既存のデータを調査し、様々な情報源から得られる基本的な知識を統合して革新的な研究を展開し、演劇博物館のデータの開発を遂行するものである。

2020年から2022年にかけての全ての課題の遂行は、2009年のこの演劇映像学連携研究拠点の設立が演劇博物館の活動において最も重要な役割を果たし、演劇博物館を特色ある演劇研究機関として活気付かせ、今後の演劇と映画の研究のための最も重要なリソースとなったことを証明している。

Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Okamuro Minako

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, run by the Theatre Museum, has been a MEXT-certified Joint Usage/Research Center since 2009. The Center is characterized by its use of the Theatre Museum, which maintains over one million items, to contribute to joint research on valuable unreleased/private materials which have not been adequately put to academic use. As of now, having received its third certification, the Center is promoting new joint research making composite use of digital data and online tools, through the digital archives created at the Theatre Museum.

The Center hosts three types of joint research on Theatre Museum holdings as follows: principal research, selected research, and encouragement research. In AY2022, as the first year of active two-year joint research teams, three principal research groups and five selected research groups were launched. Principal research, in which the Center proposes a topic, was adopted for three teams, studying respectively the manuscripts of Betsuyaku Minoru, the Kurabayashi Seiichiro materials, and theater flyers. Selected research, in which joint research topics on the Theatre Museum's valuable materials are recruited from all over Japan, was adopted for five teams, studying respectively the Eguchi Hiroshi materials, Diary of Ichikawa Danjuro II, the Dizer Collection (scripts from Kyushu-area theatrical productions censored by the SCAP [GHQ]), the Kurihara's musical scores, and the original *Tokiwazu-bushi* woodblocks. Also, in encouragement research, in which Theatre Museum researchers survey theatrical and film-related materials toward future joint research, six new topics were adopted, moving forward with the investigation and examination of the Museum's wide-ranging holdings. A part of the outcomes thereof was presented at the Museum's special and regular exhibits as well as at affiliated academic conferences.

In addition to these joint research projects, development began on the urgent theme research topics that involved surveying domestic and overseas theater trends amid the pandemic. In July, theatrical personages from the Tokyo metropolitan area were invited for a symposium intended to broadly share the issues related to collection and storage of theatrical materials. In August, a Japan–Korea online international symposium was held, inviting the Seoul Metropolitan Musical Theatre and the Honda Theater to discuss the physical "theater" as a venue to present theatrical performances. In November, the National Theatre in UK and the digital distribution representative of Shochiku, Ltd. were invited for a Japan-UK online international symposium discussing online theater and film distribution.

Furthermore, the Center is developing new joint research using digitized materials data and collaboration with Japanese and international research institutions. The "*Kuzushiji* OCR" Project, conducted jointly with Toppan Printing Co. Ltd., since 2016, held international workshops this year and last jointly with the University of California, Los Angeles and Ochanomizu University, adding *kabuki* scripts to its target materials along with *jōruri* scripts. Additionally, as an initiative expanding the potential of methods of using digitized materials, the "reconstruction" of a silent movie using the *kabuki* customs and traditions of a century ago has been attempted in cooperation with the *kabuki* actor Nakamura Kyozo and others.

Although the pandemic persists, the Center has been able to continue with a full program of activities amid various restrictions, thanks to the cooperation we have received. We intend to continue making use of the abundant research materials and digital technologies possessed by the Theatre Museum to serve as a hub for joint research in collaboration with research institutions in Japan and overseas. We appreciate your ongoing support and cooperation.

○Principal research
The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Center, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members shown below are as of the start of the fiscal year.

Principal research 1

A Study on the Collection of the Autographed Manuscripts of Betsuyaku Minoru

Principal Researcher: Umeyama Itsuki (Associate Professor, Department of Performing Arts, Faculty of Literature, Arts and Cultural Studies, Kindai University)
Collaborative Researchers: Okamuro Minako (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University, and Director, Theatre Museum, Waseda University), Miyamoto Keiko (Part-time Lecturer, Shirayuri University)

Research Objectives

The purpose of this study is to examine Betsuyaku's style as a playwright and character representations in his works, through a survey of material donated by Betsuyaku's family as well as documents concerning Betsuyaku's work which are maintained by the Theatre Museum. The topic study of the same title adopted in AY2020 investigated documents related to Betsuyaku's early works, revealing keywords important to understand the core of Betsuyaku's work, including silence, poverty, hatred, and self-sacrifice. Furthermore, interest in literature other than plays, such as the works of Miyazawa Kenji and Fukazawa Shichiro, had a significant influence on the formation of Betsuyaku's style as a playwright. Here, research from AY2022 on has organized the shifts in style from the 1970s onwards as well as working to clarify how Betsuyaku's interest in literary works such as those of Miyazawa and Fukazawa, nursery rhymes, and ancient poetry was reflected in his writing.

Summary of Research

This academic year was mainly used for a survey of unsorted documents and an investigation of the changes in the characteristics of early works from the 1970s onwards. First, through cooperation from Theatre Museum curators, all the materials were catalogued, reaching to approximately 2300 records. Among these, handwritten drafts constituted 73% of the whole. Of these, 57% were essays and critiques, followed by 30% drama-related material. In addition, 7% of the drafts had no identifiable title, whereas others had identifiable titles but were discovered in scattered form. In this year, the study involves photographing the drafts requiring further investigation and examining them within the team. Furthermore, we are photographing the handwritten Betsuyaku drafts donated by a publisher and checking whether they contain unpublished material.

Regarding shifts in style, Umeyama compiled the research outcomes in a paper submitted to *Engeki Kenkyu [Studies in Dramatic Art]*. The paper first notes the source of Betsuyaku's creative work in the emotion of hatred, based on early drafts of *Hokuro Sausage* as covered in topic research thus far. In this play, the "town" community exposes hatred toward its residence through violence. The paper touches on the major early works *Elephant* and *Landscape with Red Bird* to argue that the community's violence is transformed into kindness and caring. Also, it focuses on the relationship between the community and the individual in the 1970s *The Soyosoyo Tribe Rebellion*, concluding that the community's transformation can be grasped as a sign of the shift in Betsuyaku's interests from depicting hatred for the invisible structure of discrimination to exposing the framework of this structure.

Therefore, this academic year's research outcomes include the clarification of the materials as a whole and the organization of research results on early works as a paper. However, as research into the influence of literary works, nursery rhymes, and ancient poetry on Betsuyaku made insufficient progress, it remains as a task for the following academic year.

Principal research 2

Research on the Kurabayashi Seiichiro materials

Principal Researcher: Goto Ryuki (Associate Professor, The Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies, Rikkyo University)
Collaborative Researchers: Kamiyama Akira (Emeritus Professor, Meiji University), Yoneya Naoko (Cultural policy and arts management advisor)

Research Objectives

Kurabayashi Seiichiro (1912-2000), who joined the Haiyu-za Theater Company in 1946, immediately after World War II, established the Haiyu-za Theater in 1956 and became its CEO in 1981. He was also involved in the establishment of the Japan Council of Performers Rights and Performing Arts Organizations *(Geidankyo)*, Japan's first umbrella organization for performers in 1965, as an influential figure in the protection of stage performers' rights, support for cultural activities, and policy proposals. Through investigation and examination of the Kurabayashi holdings, previously unorganized and undisclosed, this study reevaluates Kurabayashi as a playwright and creates a foundation for basic research on postwar theater.

Summary of Research

In this academic year, we started by unpacking the boxes containing a vast quantity of materials, to confirm, sort, and investigate the contents. For specific investigation, with the help of Fujiya Keiko, Miyoshi Tamaki, and Sakuma Satoshi (the research collaborators), we started to sort and classify the materials by type, recording them, and creating a catalog.

A wide variety of materials were identified in sequence; subsequently, we selected the following materials to be sorted out and investigated.

(1) Material on the *Shingeki* (New Drama) performance in China: Material regarding the *Shingeki* performances in China (1960) involving the Bungaku-za, Mingei, Tokyo Geijutsu-za, Budo-no-kai, and Haiyu-za, covering diverse performance-related documents such as records in Kurabayashi's handwriting, a manuscript draft of *Umi no sachi* (synopsis) by Murayama Tomoyoshi, the group leader, a shorthand record of the discussion with local theater personnel, and so on. The purpose of this survey was to address the content and significance of these performances.

(2) Mizuho Theater journal: A journal of the performances of the wartime touring Mizuho Theater (Rural Culture Association), which Kurabayashi accompanied as a clerk. This material reveals the daily life and tour activities of wartime touring theaters, as well as their performance content and reception. Comparison with records of other touring theaters will provide important clues for overall consideration.

Research outcomes include a survey on Kurabayashi Seiichiro's work as a foundation for research, based on the Kurabayashi holdings and related materials; subsequently, Goto Ryuki published the study as "A foreword to Kurabayashi Seiichiro studies: Preparatory discussion of Shingeki history as seen by a playwright" (*Rikkyo Institute of Japanese Studies Annual Report* Vol. 21, August 2022). In order to examine the history of *Shingeki* from the playwright's perspective, based on an evaluation of Kurabayashi's writings, the positioning of the playwright in performance history, and previous research history, this paper focuses on Kurabayashi's career before joining the Haiyu-za. It organizes how he became a playwright and his encounter with theater (*Shingeki)*, creating a foundation for research on Kurabayashi and on the postwar history of *Shingeki*.

In addition, given that Kurabayashi provided many policy proposals at the Geidankyo for many years, and that 2022 is the 10th anniversary of the Theater Act, in order to further research on connections between Kurabayashi's work and contemporary issues, a symposium entitled "What the Theater Act Has Wrought: The 10th Anniversary and the 3-Year Pandemic" was held at Rikkyo University on September 2, 2022. The speakers were Takahagi Hiroshi (Director, Setagaya Public Theatre), Miyagi Satoshi (General Director, Shizuoka Performing Arts Center [SPAC]), Uchino Tadashi (Professor, Gakushuin Women's College), Yoneya Naoko (collaborative researcher on this project), and Uchida Yoichi (cultural journalist), with Goto serving as overall coordinator. The aim was to explore Kurabayashi's thinking by moving backward from the contemporary perspective in the field.

In the future, through a thorough examination of the materials in the abovementioned points (1) and (2), the project was to clarify their content and, through excavation and investigation of other materials, research Kurabayashi's work and the dynamics of postwar *Shingeki*.

Principal research 3

Research and Study Toward the Utilization of Film-related Materials Centered on Theater Flyers

Principal Researcher: Okada Hidenori (Chief Curator, National Film Archive of Japan)
Collaborative Researchers: Kamiya Makiko (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Shibata Kotaro (JSPS Research Fellow PD)

Research Objectives

In recent years, film studies in Japan and worldwide have performed revisionist research on film history from the perspective of film exhibitions. However, given that the silent film era, with its live vocal and musical performances, has not yet been sufficiently historicized, this study is an empirical survey of cinema exhibitions through cataloging and analysis of cinema flyers held by the Theatre Museum. Furthermore, the study builds on the survey conducted on urban Tokyo cinemas as Selective Research in AY2020-2021, taking up a new focus on other cinema flyers in Tokyo and the Kansai region toward comparative research on cinema exhibitions in East and West Japan.

Summary of research

In this academic year, in addition to further investigation of the 600 flyers that have been the research subject since AY2020, the team began cataloging 93 new flyers from Tokyo and 137 from Osaka. The process involves the detailed selection and recording of the written text information—with an eye to future utilization; thus, although it required a significant amount of time, the goal of first-stage input was achieved. As the team grasp an overall view of the flyers, it is confirmed that they provide an ideal overview of the diversity of early Showa-era cinemas, from the advertising methods (mainly among the Osaka materials) used as differentation from first-run theaters to the diverse non-film attractions offered. These materials are important in highlighting the changes in theater programs at the time of the shift from silent films to talkies.

Presentations of the survey outcomes include a panel at the 16th Annual Conference of the Association for Studies of Culture and Representation (held at Tokyo Metropolitan University on July 2, 2022), composed of collaborative researchers Shibata Kotaro and Kamiya Makiko and research collaborator Shirai Fumito (Nagoya University of Foreign Studies), on “Texts and Contexts in Taisho-era Cinema(s): Film Promotion Materials.” Individual presentations contributed to further development of the survey topics of the previous academic year, such as the transformations of cinema exhibitions and the film distribution structure in Tokyo, intertextual consideration of the movie *Goro Masamune Koshiden* (1915), and aural elements of silent-era German films and its music as well as their distribution in Japan and elsewhere; the presentations were followed by a discussion among the participants and the commentator, Ueda Manabu (Kobe Gakuin University).

On February 27, 2023, at the end of the academic year, a joint seminar was held with the selected research project “Research on Musicians and Musical Bands through Kurihara’s Music Score Collection” (principal researcher Nakano Masaaki) at Nagoya University of Foreign Studies. As well as sharing future research issues, this seminar discussed cinema and music from various perspectives, taking into account the new research interest, that is, regional cinema exhibition.

The team also held a workshop at the Theatre Museum on September 7, 2022, to consider further research use of film-related materials. In this workshop, Honchi Haruhiko, a scholar of Japanese film history, lectured on “Collecting and Studying Early Film Materials.” After the lecture, participants exchanged opinions on the collection and use of early film promotion materials occurred while viewing several dozen pieces from Honchi’s collection.

○Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Center provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members shown below are as of the start of the fiscal year.

Selected research 1

Dance during the Wartime and the Postwar Period, Seen Through the Eguchi Hiroshi Materials

Principal Researcher: Miyagawa Mariko (Assistant Professor, Department of Body Expression and Cinematic Arts, College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)
Collaborative Researchers: Kitahara Mariko (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Lamolière, Maëva (Doctoral Program, Department of Dance, the University of Paris 8)

Research Objectives

The objectives of this study are to survey the "Eguchi Hiroshi Holdings" (280 items, mainly photographs and newspaper clippings related to dance) and to depict the Japanese dance scene throughout the politically tumultuous Showa era. Eguchi Hiroshi (1903-1982) was a dance critic for half a century, from the prewar through postwar periods. The investigation of these materials is expected to provide a new perspective on 20th-century Japanese dance history, which has so far focused on renowned dancers. This study takes particular note of the plentiful materials from the 1930s and 1940s, during and surrounding World War II. Through the Eguchi materials' broad and meticulous records of the dance scene during this period, a more detailed understanding of the transformations of the dance scene can be obtained.

Summary of Research

○ Characteristics of the Materials

The material can be divided into the dance photographs owned by Eguchi Hiroshi, newspaper clippings mainly including his own theater reviews, and reference materials such as performance programs. Eguchi joined the culture department of the *Kokumin Shimbun* (later *Tokyo Shimbun*) in 1928, beginning to write dance reviews around 1930. His sphere expanded to include a dedicated dance column in the *Ongaku Shimbun* (a music newspaper founded in 1931), and he continued to write in various periodicals and media until just before his death. Eguchi is notable for his continuous, comprehensive observation of and writing on dance as a newspaperman, and for his wide range of familiarity from Western to Japanese dance.

Eguchi's activities were not limited to writing dance reviews, he also wrote for performance programs, served as advisor and director for dance-related organizations, and judged competitions. Furthermore, he was invited by the Agency for Cultural Affairs and local governments to take part in councils of experts. He received a Medal of Honor with purple ribbon in 1971 for his overall contributions to the art of dance. Similarly, the materials suggest the breadth of his activities.

○ Research Outcomes for This Academic Year

Owing to the fact that this was the first year of the study, it began with grasping the specific content and nature of the Eguchi Hiroshi holdings. During this process, the abovementioned characteristics became clear once again. Therein, Eguchi's long career and meticulous collection of materials are symbolized by the scrapbook of clippings on Ito Michio. Going back as far as an introduction of Ito's activities overseas from 1917, the collection spans the prewar and postwar years to provide a glimpse of Ito's profile. The materials were photographed and digitized.

In addition, the other material digitized this year included a statement of intent, program draft, and program selections (classical theater) report for the performances of the Japan Central Cultural League's 2600th Anniversary of Imperial Japan Celebrations. This material provides an overview of the event, which draws attention in recent years with reference to dancers' work during the war.

Based on the abovementioned surveys, cataloguing work was subsequently initiated. In addition, a presentation of research outcomes and this year's survey of the collection was held on January 28, 2023. After an overview of the materials and Eguchi Hiroshi provided by Kitahara Mariko, Miyagawa Mariko reported on dancers' work during the war, and Maëva Lamolière gave a presentation based on her doctoral thesis, shortly to be submitted, concerning women dancers' bodies and revues.

Selected research 2

The Literary Circles of the Middle Edo Period, Focusing on Approaching *Kabuki* Performers Through Diaries

Principal Researche: Björk, Tove Johanna (Professor, Saitama University Graduate School of Humanities and Social Sciences)
Collaborative Researchers: Yusuke Inaba (Associate Professor, Wako University Faculty of Liberal Arts), Takayuki Hioki (Associate Professor, School of Information and Communication, Meiji University)

Research Objectives

Taking the newly discovered "Diary of Ichikawa Danjuro Hakuen II"—i.e., the diary text or "Hakuen Diary"—into consideration, the objectives of the present study include (1) the examination of the provenance and authenticity of the material; and (2) clarification of the literary circles of the middle Edo period, focusing on *kabuki* performers. The Hakuen Diary, along with the Kakibyoshi Diary, was copied by the doctor of the *kyoka* parody poet Shikatsube no Magao and his son. After the loss of Danjuro II's diary to fire in the early Bunka period, it constitutes an important document as a record of the daily lives of *kabuki* performers in the middle Edo period as well as the literary sphere in which they lived. With this diary as a starting place, this study intended to clarify the Kyoho-era *kabuki* actors' connections to *haikai* poets and other literati in order to clarify the social importance of the literary circles the actors participated in.

Summary of Research

○ Preparation and Material Collection

The main activity in AY2022 involved gathering materials. The lead researcher and others assigned to the task digitalized and, based on image data, began analysis of the Hakuen Diary and the notes to the Kakibyoshi Diary and Hakuen Diary recorded among the *Writings of the Late Hakuen* (copied 1917) by Ihara Seiseien, as well as related materials including the *Meiwa Gikan* (1767), which introduces Meiwa-era *kabuki* theater personnel, *kabuki* performers, *shibai-jaya* theater teahouses, kyogen playwrights, and theater musicians, among others, along with the *Danjuro VII Chakuson* (1800), which presents Kansei-era *kabuki* performers' haiku and records of the work of the line of Danjuro performers.

○ Analysis and Research

Based on analysis of the materials above, the lead researcher, Tove Björk, analyzed the cultural exchange among Danjuro II and Kawarazaki Chojuro, head of the Kawarazaki-za theater, Rigo the doorman of the Nakamura-za theater, the comic actor Tsuruya Namboku I performing at the Ichimura-za theater, Daikokuya Kusaemon of the Fukiya-cho *shibai-jaya* teahouses, the bookstore owner Suharaya Seijiro, and the painter Hanabusa Itcho, among others. These exchanges were presented in the research series annotating the diaries of Ichikawa Danjuro II "Nidaime Ichikawa Danjuro nikki shokai: Dai-6-kai Kyoho 19 (1734)-nen 5-gatsu 19-nichi-29-nichi [Reading the diaries of Ichikawa Danjuro II in detail: Part 6, May 19 to May 29, 1734]" (*Saitama Daigaku (Kyoyo Gakubu) Kiyo [Saitama University Faculty of Liberal Arts Review]*). This series of annotations, which began in 2014, is to continue clarifying the content of Kyoho-era cultural exchange based on Danjuro II's diaries.

In September 2022, the assigned researcher, Inaba Yusuke, set up the diaries of Danjuro II and prepared for even deeper analysis of the interchange among poets at the Edo-za theater and *kabuki* performers. From here on, in addition to the diaries, the study will strive to clarify the state of the middle Edo-era literary sphere, focusing on *kabuki* performers, through books of poetry as well.

Selected research 3

Empirical Research on Regional Theatre Under the GHQ (SCAP) Occupation: Focusing on the Kyushu Area

Principal Researcher: Ogawa Chikashi (Professor, Faculty of Childhood Education, Yokohama Soei University)
Collaborative Researchers: Sugawa Wataru (Associate Professor, Faculty of Humanities, Fukuoka Jo Gakuin University), Hatanaka Sayuri (Part-time Lecturer, Osaka University)

Research Objectives

The objective of this study was to clarify the characteristics of the theater produced immediately after World War II in the Kyushu area, particularly theater produced by laymen who were not professional performers. This will be done through analysis of censored scripts from Kyushu theater companies during the GHQ (SCAP) occupation (the Dizer Collection).

Summary of Research

In this academic year, 109 scripts from the Dizer Collection were viewed and those considered important were digitized. The materials which became the focus of the survey included scripts involving the Constitution Popularization Society, those of theater companies active in Kumamoto, and those in the *kyokaden* and *matatabimono* genres.

The Constitution Popularization Society, formed for education on the principles of the new constitution, conducted a year of large-scale activities through every medium, including lectures, films, shadow plays, songs, and dancing. Although theater had not been previously known to be used by the Society, the survey found 8 scripts with its involvement among the Dizer Collection. The results of the analysis thereof were reported at the 69th Conference of the Japan Society for the Study of Adult and Community Education, held on September 18, 2022. The analyzed scripts included 6 from Saga, 1 from Yamaguchi, and 1 from Fukuoka. All were dramatized versions of the specifics of the principles and articles of the new constitution, considered a pioneering approach to constitutional drama. Notable points include the involvement of teachers as playwrights and applicants and the improvised nature of 4 of the 8 scripts. These materials show that constitution popularization made use of regional human resources and theater culture.

Among the Kumamoto theater companies, the survey focused on performance scripts for the following three companies active immediately after the war: the Bungei-za (12 scripts), the Orion-za (6 scripts), and the Nikkyo Theater (7 scripts). Although the scripts alone do not allow identification of performance dates and times, some of those for the Bungei-za and Orion-za could be determined based on reference to Ogata Iichi's *Sengo no Kumamoto engeki [Postwar Kumamoto Theater]* (Nihon Dangisha, 1983), the Kumamoto local journal *Yobu [Calling]*, ed. Yamaguchi Hakuyo (Yobu no Kai, 1961-1962), and the *Kumamoto Nichinichi Shimbun* newspaper (1946-1947). The Bungei-za performed *Uryu-ko*, *Deshimaruke no hitobito, Mateo Falcone,* and *Kaijin* at its curtain-raiser in December 1945 and its second performance in April 1946, whereas the Orion-za performed *Kokyo no koe* and *O-some Hisamatsu nijuso* at its curtain-raiser in April 1947. The last-named play was a comedic dance drama in which O-some and Hisamatsu, whose original love-suicide ending was judged unsuitable for the new age, have a revised happy ending in the "spirit of the new era." Postwar Kumamoto was home not only to new theater but also to revues including song and dance reflecting the times.

Of the *kyokakuden* and *matatabimono* genres, popular before and after the war with the masses, almost no contemporary performance scripts remain; thus, the Dizer Collection is considered highly valuable. This academic year identified works thought to be variations on the *Onna-Kunisada, Kunisada Chuji, Mori no Ishimatsu,* and *Mabuta no haha* plays from their titles and analyzed their contents for similarity and differences.

Selected research 4

Research on Musicians and Musical Bands through Kurihara's Musical Score Collection: Music for Stage and Cinema during the Early Showa Era

Principal Researcher: Nakano Masaaki (Professor, College of Humanities, Shukutoku University)
Collaborative Researchers: Shirai Fumito (Associate Professor, School of World Liberal Arts, Nagoya University of Foreign Studies), Yamakami Yohei (Project Lecturer, Komaba Organization for Educational Excellence, The University of Tokyo), Mori Masato (Independent Researcher), Kojima Hiroyuki (Doctoral Program, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

Research Objectives

Kurihara Shigekazu (1897-1983) was a musician active during the early Showa period in the Enoken Orchestra and Shochiku Kinema's performance department, as well as the P.C.L. (Photo Chemical Laboratory) Film Studio in the early day of sound film. This study surveyed and analyzed musical scores formerly belonging to the Enoken Orchestra and Kurihara Shigekazu (approximately 1,000 items). Based on the results of the basic survey of sheet music materials conducted up to 2021, the research will proceed with a combined survey into contemporary documents and related sheet music collections. Through empirical research into the activities of Enomoto Ken'ichi (1904-1970) and the musicians and bands surrounding Enomoto and Kurihara, the goal is to clarify the production and creative process which occurred across contemporary theater, music, and film.

Summary of Research

○ Cataloguing the Sheet Music and Survey of Related Documents

Regarding the catalog of approximately 1000 items for which basic information was obtained up through 2021, updates for the wider usage were made to provide information on composers, arrangers, individual musical pieces of uncertain provenance, etc. Furthermore, the study conducted a basic survey of the materials (Taito City Shitamachi Museum holdings) formerly owned by Shinohara Masao (1894-1981), a musician in contact with Kurihara, selecting materials closely related to the Kurihara holdings and completing the groundwork for a systematic comparative survey in the future.

The study also produced results with regard to tracing Kurihara's work before the Enoken Orchestra. In addition to purchasing and investigating material from the Chitose Theater, a movie theatre in Nagoya where evidence exists that Kurihara worked briefly as a musician, a careful study of the theater's programs (approx. 70 items) already in the Theatre Museum collection revealed hints to his early activities.

○ Presentations of Related Research Outcomes and Public Seminar

Using the report on outcomes compiled in 2021, collaboration and sharing with experts in musicology and film studies continued. The principal researcher, Nakano and collaborative researcher Mori published books in related areas (respectively, *Rosi opera to Asakusa opera [Rosi Opera and Asakusa Opera]* and *SP record nyumon [Introduction to 78-rpm records]*. In addition, the collaborative researcher Shirai Fumito presented on film music from silent movies through early talkies at the 21st Quinquennial International Musicological Society Congress 2022 (Athens, Greece).

Using the research network formed in this way, a public seminar was conducted jointly with the Nagoya University of Foreign Studies World Liberal Arts Center in February 2023. Conducted jointly with the principal research 3 on "Research on Study Toward the Utilization of Film-related Materials Centered on Theater Flyers" the seminar investigated the diverse ways in which Western music and film culture developed and mixed with the local vernacular practices. Starting in particular with the reception of Western music in Nagoya, where the Ito Gofukuten Boys Music Band, to which Kurihara belonged, was launched, the member of the research groups gathered for research reports and discussion. Through an exchange of opinions with Nagoya-based experts and researchers, including Shichijo Megumi of the Aichi University of the Arts, the seminar proved to be an ideal opportunity to position Kurihara's activities within the broader contexts of musical culture of the Taisho and early Showa eras, not limited in his activity in Asakusa and his collaboration with Enomoto.

Selected research 5

Publishing Activities of the Sakagawaya, Publisher of the Original Tokiwazu-bushi

Principal Researcher: Takeuchi Yuuichi (Professor, Research Institute for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts)
Collaborative Researchers: Suzuki Eiichi (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Tsuneoka Ryou (Director, Tokiwazu Association), Abe Satomi (Part-time Lecturer, Musashino Academia Musicae), Maeshima Miho (Part-time Lecturer, Tokyo University of the Arts), Shigefuji Gyoo (Part-time Lecturer, Edogawa University) , Konishi Shiho (Collaborative Researcher, Kyoto City University

Research Objectives

In 1860, near the end of the Edo period, the Sakagawaya inherited woodblock prints of the Tokiwazu from its original printer, the Igaya, for reprinting; it continued to release new editions from that point into the Showa era, printing original copies (rehearsal copies) from woodcuts up through 1987 or so. These woodblock prints are the woodblocks—approximately 800 research materials known as the Sakagawaya Tokiwazu-bushi original woodblock holdings—which were donated to the Theatre Museum. The research team has conducted bibliographic research in AY2020 and 2021, creating a title catalog as well as a detailed catalog for each text woodblock. In this academic year, the team focused mainly on woodblock with supplementary material such as title tags and colophons as well as woodblock sides, creating an ancillary catalog for these along with working toward a more multifaceted overview of the publishing work of the Sakagawaya.

Summary of Research

The main research outcomes for AY2022, as well as the ancillary catalog above, include a symposium on the topic of the Tokiwazu-bushi original woodcuts and the Sakagawaya's publishing activities, held online on November 26, entitled "Studies of the Tokiwazu Joruri Print Woodblocks: From the Theatre Museum Sakagawaya Holdings." Reports on research given at the symposium included Shigefuji Gyo's overview of the woodcut survey status and issues, as well as Suzuki Eiichi's testimony, which focused not only on his own encounter with Sakagawaya and their woodblocks but also on the circumstances and background of the people concerned with Tokiwazu-busi that led to the materials' donation to the Theatre Museum. Furthermore, Takeuchi Yuichi introduced examples illustrating the connection between the published rehearsal books and the woodcuts, while Tsuneoka Ryo and Konishi Shiho described the performers connected with the modern and contemporary Sakagawaya. Further, two guest lecturers (Nagai Kazuaki and Kaneko Takaaki) spoke on Meiji-era woodblocks and copyrights, lecturing on the properties of the Sakagawaya woodblocks from the perspective of prior research on woodblock prints of text and pictures. Their discussion demonstrated the significance and importance of the Sakagawaya woodblocks as academic research materials. During the question-and-answer period, opinions were exchanged from various perspectives on the publishing activities and woodblocks of the Sakagawaya, led by Abe Satomi and Maeshima Miho.

Regarding the Sakagawaya, we have records in the late-Edo *Shotonya namae cho [List of Wholesalers]* of the transfer of copyrights from Igaya Kan'emon (prior study by Takeuchi, 1996) and a resumé of the Sakagawaya owner listed in the 1927 *Gendai ongaku daikan [Book of Modern Music]*, a list of performing names, but other than the Tokiwazu-bushi printed originals and their existing woodblocks, there are few direct records of the Sakagawaya owners and their publishing activities. This year's symposium served to present new material such as newspaper articles on the inheritance and owner change of the Sakagawaya in the early Meiji era, recollections from performers of the Sakagawaya in the late 1970s and 1980s, its last days, and the existence of photographs belonging to relatives, but the individual points have not yet been connected to form an overall view. Information gathering and survey research is to continue in order to identify the periods of inheritance/owner change, the respective owners and the employee trends, and the ups and downs in publication of the Tokiwazu originals.

Encouragement Research Project

In 2020, we embarked on "encouragement research," wherein we conduct collaborative research with young scholars at the Theatre Museum. In 2022, six projects were adopted, and a variety of research was conducted.

The following six research projects were adopted in 2022: (1) Survey Research on the Images, Audio, and Video Materials of *Jōruri* Theater (Harada Masumi); (2) Survey Research on Materials Related to *Rakugo* and *Kodan* Story-Telling Owned by the Theatre Museum: Focusing on Tanabe Koji's Collection (Akai Kimi); (3) Study on Japanese and British Female Playwrights and Translators: from the Mid-16th Century to the 21st Century (Ishibuchi Rieko); (4) Survey research on the Materials Relating to Plays in Japan's Small-sized Theaters and the Study of the Ways to Use Them: Focusing on Ohta Shogo and Sato Makoto (Kim Yun-jeong); (5) Survey and Research on Foreign Film Brochures (Kawasaki Keiya); (6) Basic Study on Sexual Representations in Japanese Cinema in the Twilight of the Studio System (Hatokai Mio).

A wide variety of materials from the Theatre Museum were investigated and examined in cooperation with researchers inside and outside the university. Some of the results were presented in the Theatre Museum's Special Autumn Exhibition, "Words, words, words: Kazuko Matsuoka and Her Translation of Shakespeare's Plays," and the Autumn Exhibition, "Haruki Murakami Journey into Movies," among others. The study result of (1) was widely introduced at the *Kabuki* Society Fall Conference 2022 and received this year's *Kabuki* Society Encouragement Award in conjunction with the result in the Theatre Museum's Spring Special Exhibition, "Hanji Chikamatsu: Genius *jōruri* author."

Flyers for the Exhibitions 2022

Project Organized by the Center

In order to develop the results of the urgent theme research project that have been investigating the directions of theater during the coronavirus pandemic since 2020, we have embarked on initiatives that will lead to new discussions on the domestic and overseas trends in theater, arts, and society. Moreover, as well as collaborative projects with research institutions in and out of Japan, we have been conducting pioneering joint research projects that utilize digital data.

Joint Research Projects on Theater During the Coronavirus Pandemic

Based on the results of the urgent theme research from 2020 to 2021 that investigated the domestic and international theater trends during the coronavirus pandemic, we launched multifaceted discussions in 2022 by broadly relating them to the movements in theater, arts, and society. At the end of last fiscal year, we invited the curators of the Suita City Museum in Osaka and the Urahoro Municipal Museum in Hokkaido and held an online symposium, "Museums in the Age of the COVID-19 Pandemic: Issues and Prospects Concerning Collection and Exhibition of Materials" (March 7, 2022) Following the this event, we held another symposium with representatives of the New National Theatre, Tokyo; the Tokyo Metropolitan Theatre; and the Saitama Arts Theater, "Challenges and Prospects for Archiving Theater Materials in Theaters and Museums" (at Ono Auditorium, July 21), and widely shared the issues revealed by the pandemic that are related to the preservation and collection of theatrical materials. As a sequel to the event, we held a private round-table discussion, and learned about the efforts of companies that continue to make leaflets and brochures despite the advancement of digital PR activities and found out the significance of the production and physical preservation of materials made of paper, such as flyers, posters, tickets, and free magazines, related to theaters (December 21, at the Center). We are going to compile the contents of the symposium and the round-table discussion into a booklet as a result report by the end of this fiscal year.

Furthermore, we invited representatives of the Seoul City Musical Company and the Honda Theater Group to the Japan-Korea International Online Symposium, "Theater in the Post-COVID Era: For the Theaters of the Future," to share and compare the situations between the two countries and discussed the role of a "theater" as a home for plays in the post-COVID era that we are entering into (August 30). We also invited the distribution directors of the National Theatre in the UK and the Shochiku Co., Ltd. on the topic of the online streaming and screening of plays that have increased in demand due to the pandemic and hosted the Japan–UK International Online Symposium, "The Future of Theatre and Online Streaming/Screenings in Cinemas: From the Cases of National Theatre Live in the UK and Shochiku in Japan" (November 30). We compiled the record of these international symposia, respectively, into a report booklet in Japanese/Korean and Japanese/English and widely released the videos of the events in three patterns, using Japanese, Korean, or English, and the original languages of the presenters of the day (for the reports on this project, including the symposia, see page 27 to 29).

We also published "Chronology of Theater and COVID-19" that is listed on the catalog of the 2021 Spring Exhibition, "Lost in Pandemic: Theater Adrift and Expression's New Horizons" and on Enpaku book (No.118) as the "Chronological Database: Theater and COVID-19," in the Waseda University Cultural Resources Database in November 2022. We will continue to investigate the trends in the theater in the coronavirus disaster which have not yet finished and publish the update on the information of February 24, 2022, and later as needed.

Report on COVID-19 Related Symposia

Symposium "Challenges and Prospects for Archiving Materials Related to The Performing Arts in Theaters and Museums"/Round-Table Discussion: "Recording Theater on Paper"

How should we record the one-off expressions called performing arts and preserve historical materials related to performances, such as flyers, posters, programs, and scripts, for the future? This has been shared as an urgent issue in the performing arts community, particularly in recent years. Of course, it is not a new topic of discussion for us. However, we are all aware that the novel coronavirus pandemic, going on since 2020, has highlighted the importance of creating archives (including digital ones) even more clearly.

With this awareness of the issue, we hosted a symposium and a round-table discussion on archiving materials related to the performing arts as a project organized by the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts.

At the symposium "Challenges and Prospects for Archiving Theater Materials in Theaters and Museums" (at Ono Auditorium, on 21 July 2022, co-organized by the Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies, Rikkyo University), we invited the representative of major public theaters in the Tokyo Metropolitan Area, who are involved in archiving and learned how each theater catalogs performance records and stores materials. We also introduced the initiative by the Theatre Museum and the roles of its library.

The speakers included Hoshikawa Tetsuya (Director, Business Development Department, New National Theatre, Tokyo), Maeda Keizo (Chief director, Public Relations and Marketing Section, Tokyo Metropolitan Theatre), Ukegawa Sachiko (Associate Director, Production Department, Saitama Arts Theater), Fujiya Keiko (Librarian, the Theatre Museum), Kodama Ryuichi (Deputy Director of the Theatre Museum) and Goto as the moderator.

Although digital archives have been attracting attention recently, we focused mainly on primary sources, paper archives in this symposium. We also focused on the significance of libraries and archives attached to theaters and museums. Based on these, a discussion developed on what can be done for future generations, not only for individual theatres and museums, but also for the performing arts community to share the challenges and prospects for achieving this.

Following the results of the symposium, we held a round-table discussion, "Recording Theater on Paper" (December 21, at Waseda University). The attendees included Sasame Hiroyuki (President, Poster Hari's Company); Midorikawa Norihito (Representative director, Nevula Enterprise); Yoshida Shoji (Longrun Planning Corporation, Director CMO/"confetti" editor in chief); Kodama Ryuichi (Deputy Director, the Theatre Museum), and Goto as the moderator.

There, we discussed the value of "paper materials" such as flyers, posters, tickets and free magazines related to theater that are consumed each time, and the significance of their actual production and preservation, based on coronavirus pandemic experience.

For the Theatre Museum, these events served as an opportunity to renew its awareness of its archive, which has comprehensively handled performing arts materials for many years, and to review its role and responsibilities as a comprehensive museum specialized in theater by hearing voices from outside the Museum. Those working at the Theatre Museum should be aware of attention from outside and to share what people think of the Museum, what people expect from the Museum, and how much they trust the Museum.

We are going to compile the contents of the symposium and the round-table discussion into a booklet as a result report by the end of this fiscal year. The job titles of the speakers and attendees were those at the time of the events.

(Goto Ryuki, Assistant Professor,
The Edogawa Rampo Memorial Center for
Popular Culture Studies, Rikkyo University)

"Theater in the Post-COVID Era: For the Future of Theater"

Since February 2020, the Theatre Museum has been collecting materials related to stage performances canceled or postponed due to the coronavirus pandemic. The materials were exhibited online and offline and two symposia were held to consider the situation with theaters during the pandemic. Following these events, on August 30, 2022, the Museum hosted the Japan-Korea International Online Symposium "Theater in the Post-COVID Era: For the Future of Theater" as a continuation. At this symposium, theater officials from Japan and South Korea were invited to discuss the situation with the theatrical scene in the third year of the pandemic as well as to discuss theaters as a venue to present theatrical performances. The attendees shared the challenges and prospects theaters face today and considered their role now that we enter the post-COVID era.

In the first part of the symposium, four speakers each gave a 15-minute presentation. Honda Shinichiro, General Manager, Honda Theater Group, referred to the nine theaters he currently manages. He talked about the Shimokitazawa and Shinjuku areas, where they are located, speaking about the relationship between the residents and the theaters. He also explained the theater management policy reconfirmed in the pandemic. Following that, Kim Duk-hee, Head, Seoul Metropolitan Musical Theatre, introduced projects to videotize the performances they have been doing, mainly in public theaters in South Korea since 2020, and explained the challenges and potential that theaters have today, having emerged from those examples. Hirata Oriza, a playwright and director, explained the practical applications of the social role of arts through theaters and schools and outlined his vision for the future. Finally, Lee Soung-gon, a professor at the Korea National University of Arts, examined the concept of live performance from various theories under the theme of "online streaming of performances and audience's experience of liveness" and presented the possibility of transforming and expanding the concept of live performance in a theater by mentioning the example of three online streaming performances.

In the latter part of the symposium, the attendees discussed the differences in the public policies on culture, art, and support programs between the two countries, prompted by the talks on how theaters in Japan and South Korea have responded to the epidemic. We were able to reflect on the theatrical world of each country not only in the context of the pandemic but also from a broader perspective. During the Q&A session, we exchanged views on the changing theatrical experiences with the increase in the online streaming of performances while referring to some examples of Korean theaters and their effort to put plays on stage. It has been a significantly meaningful occasion for all the participants as giving specific examples enabled us to share information on the actual situation of theaters operating amid such changes.

(Kim Yun-jeong, Research Associate, the Theatre Museum)

The UK-Japan Online Symposium "The Future of Theatre and Online Streaming/ Screenings in Cinemas: From the Cases of National Theatre Live in the UK and Shochiku in Japan"

On November 30, 2022, we held the Japan-UK International Online Symposium "The Future of Theatre and Online Streaming/Screenings in Cinemas: From the Cases of National Theatre Live in the UK and Shochiku in Japan," based on the results of the Japan-Korea Online Symposium held in August this year as an expansion of the "Theater-related data collection and research during the COVID-19 pandemic" launched in 2020. The theme of this symposium was the online streaming and screening of plays, where demand has increased due to the coronavirus pandemic. Although people may regard such services as an "alternative measure" to live stage performances during the pandemic, the symposium invited producers and managers at the National Theatre in the UK and Shochiku in Japan, who have been making efforts in online streaming and screening since before the start of the pandemic, and researchers specialized in Shakespeare and Japanese classical performing arts. We discussed the changing role of theaters; the relationship between online streaming and theaters; and the transformation of the theatrical experiences such services would bring, while sharing examples of online screenings of performances in the two countries and the challenges and prospects we face.

In the first part of the symposium, each speaker gave a presentation of approximately 15 minutes. Ms. Flo Buckeridge, Deputy Director, Digital Media Department, National Theatre in the UK, discussed the role of National Theatre Live, which has changed before and after the pandemic, as well as the initiatives the theater has undertaken during the pandemic. Mr. Kubotera Yuji (Manager of the Theatrical Business Division, Shochiku Co., Ltd.) discussed the streaming of *Kabuki* play footage and the creation of content for domestic and international screenings during the pandemic based on the examples of *Cinema-Kabuki* and MET live viewing in the pre-online streaming era, as well as the issues concerning

the profitability of the services for the company. Dr. Erin Sullivan, from the Shakespeare Institute at the University of Birmingham, introduced her most recently edited books—*Lockdown Shakespeare: New Evolutions in Performance and Adaptation* (2022) and *Shakespeare and Digital Performance in Practice* (2022)—and discussed the current state of online streaming of British theatrical plays, mainly those by Shakespeare. Prof. Kawai Shinichiro, from the University of Tokyo, explained the attempts made so far to stream theatrical plays in Japan and the new possibilities for the future of theater. Finally, Prof. Kodama Ryuishi (Waseda University & Deputy Director, the Theatre Museum) mainly discussed the activities of the online streaming of traditional Japanese theater based on the attempts made at the Center (in relation to the JDTA and the EPAD) amid the pandemic.

During the discussion and Q&A session in the latter part of the symposium, the participants reflected on the history of theater and held a lively exchange of views on its future while looking toward the post-COVID era. The central themes included how to relate online streaming services to attracting an audience and how to share the occasion and a sense of community in the theatrical experience. We also touched upon other topics, such as the issues regarding obtaining the rights for online streaming and more.

(Rieko Ishibuchi, Assistant Professor, the Theatre Museum)

International Workshop on deciphering *kuzushiji*

Ever since it began receiving support for functional enhancement in 2016, the Center has been holding "*kuzushiji* reading support projects" in conjunction with Toppan Printing Inc. (hereafter, Toppan Printing), with the idea of creating a "*Kuzushiji* OCR". Since fiscal year 2020, the Center has embarked on an educational project combining cursive script data accumulated from results up to 2019 and the new online deciphering support system developed by Toppan Printing. In 2022, we hosted an international workshop for researchers and graduate students at Waseda University, Ochanomizu Women's University, and the University of California, Los Angeles, as we did the previous year. This year, in addition to the previous *jōruri maruhon*, we used the script of a *kabuki* play, "*Tokaido Yotsuya Kaidan*," as a new material. While using the *kuzushiji* OCR as a supporting deciphering tool, the Center explored possibilities of the collaborative deciphering of the classical Japanese theater materials and international research exchanges based on the work.

Furthermore, we created a *kuzusiji* character style database of *jōruri maruhon* "*Sugawara Denju Tenarai Kagami*" as a continuation of the project to build a comprehensive database of classical books using the *kuzushiji* OCR we worked on from 2016 to 2019. We are planning to offer the completed character style dataset on the website of the Center as a result of the project at the end of this fiscal year.

Project to Utilize Theater- and Film-related Materials

The Center is actively promoting the digitization of materials held by the Theatre Museum and working to expand the possibilities of how to make use of such materials. This year, we have mainly digitized scenarios from the post-war occupation period and films of actors, such as Takizawa Osamu, Miyamoto Ken, and Ozawa Shoichi—and promoted the development of an appropriate environment for the research on theaters and movies. This year, we again held screenings of digitized silent movies based on the information from historical research. Since 2020, we have been taking the initiative in making public the video recordings of the sight of rescreenig. In 2022, we took up silent film "*Kaminarimon Taika Chizome no matoi*" (1916) and attempted to "reconstruct" its screening in the customs and traditions of the *kabuki* as was the usual practice 100 years ago, and with the narration by Nakamura Kyozo, a *kabuki* actor, and the musical performance of traditional Japanese instruments by Katada Kisayo, a musician of *Shinpa*, and others. We also recorded the talks by Nakamura, Katada, Kataoka Ichiro, a *benshi* (a live narrator), Shibata Kotaro (JSPS Research Fellow, PD), and Kodama Ryuichi, Deputy Director of the Center. We published the results online for a limited period and widely publicized them in Japan and abroad.

AY2020–AY2022 External Evaluation

Three external evaluation committee members conducted an external evaluation on the Waseda University Theatre Museum Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts over a three-year period beginning in 2020 (Reiwa 2), upon the receipt of its third accreditation. The following presents the full text of the evaluation.

Nagata Yasushi (Professor, Graduate School of Letters, Osaka Univeristy)

Although the Center operated projects as a hub from academic years 2020 and 2022 during the COVID-19 pandemic, we recognize that it has exerted its maximum effort and achieved significant results as a collaborative research center for theater and film studies. It is now considered an indispensable hub for the study of the theaters and films of contemporary Japan.

Regarding the Center's collaborative research projects, it seems to be promoting unique and valuable studies. We appreciate its stance of proactively seeking the diversification of film studies by adopting various types of research, such as principal, selected, urgent theme, and encouragement research. Furthermore, its collaborations with various partners make it a core research project hub. However, although we are aware that it developed projects within a limited overall budget, considering the overall volume of its archived documents, the fact that the number of its principal research studies has been between 1 and 3 appears to be somewhat insufficient.

Nevertheless, we appreciate the development of well-designed projects organized by the Center. Although the category of "Digitization of theatrical video materials and diverse ways to make them publicly available" is apparently unlisted, we praise the Center for what is mentioned in its achievement summary, which exceeded expectations. We expect further development because the digitization of research materials and the release of databases are essential projects in this day and age. Moreover, although we assume that this was because it operated projects during the pandemic, there seems to be a lack of progress in collaborations with overseas research institutions.

The. center's management system has a stable structure, and there seems to be no cause for concern as a hub organization. Nonetheless, we want to know how the Center is regarded at the university level. We assume that a considerable number of researchers must be in the theater studies course at the university. If that is the case, it seems possible for it to have more powerful university-wide collaborations and support.

We appreciate its highly proactive stance toward public relations activities. However, it seems unlikely that researchers and the public living in areas other than Tokyo would find the content of its projects as relevant as those based in Tokyo. A museum's primary mission is to make archival materials available to the public. Thus, creating an open environment that allows researchers and the public to access them freely is desirable. We hope to see the development of an environment that enables free access for the public, including researchers and people living outside of Tokyo.

Saito Ayako (Professor, Department of Art Studies, Faculty of Letters, Meiji Gakuin University)

The Waseda University Theatre Museum, as the only museum in Asia specializing in theater and film arts, received accreditation as a "Collaborative Research Center" from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in 2009; its certification has since been renewed for the third time. This external evaluation is positioned as an interim report in the six-years of project development beginning in 2020. The objectives of the Center's projects at the Museum are twofold. First, to academically contribute and disseminate information to society by encouraging and promoting the research and using and public sharing of the Museum's collection as a research project. Second, as a sponsored project, is to organize unpublished materials from the Museum's extensive archives for public release and promote their use as cultural resources by making them accessible to researchers outside the university. In addition, research projects based on joint research are divided into two-year Principal Research and Selected Research programs and a one-year Encouragement Research program to encourage young researchers affiliated with the Museum and enable the multifaceted development of the Museum's functions and activities.

From 2020 to 2021, the strict restrictions on public activities due to the COVID-19 pandemic made it difficult for the Museum to develop the originally planned projects, including international exchanges; however, the fact that special research subjects were established to investigate theatrical trends to record and understand the special circumstances posed by the COVID-19 pandemic demonstrates the flexibility of the Museum's activities as a base project. In March 2020, the online symposium "Museums in the Age of the COVID-19 Pandemic: Issues and Prospects

Concerning the Collection and Exhibition of Materials" was held. The results of ongoing research culminated in the exhibition "Lost in Pandemic" in 2021, which was presented to the public as an exhibition of the Museum's activities as a center for the preservation and archiving of materials, and a living library that confronts the actual social realities of society. This is an appropriate activity for a library that preserves and archives materials and, simultaneously, faces the actual social realities of society.

In addition to the existing Principal Research and Selected Research programs, the Encouragement Research program, which encourages research by young researchers affiliated with the Museum, has been added to the Selected Research category as of 2020, ensuring a wider range of research activities. The thematic research on the collection of the autographed manuscripts of Minoru Betsuyaku, representing Principal Research, is a project to examine the materials donated in 2019. This study was a wise and timely decision considering the risk of the donated materials being buried in an unorganized state if it had not been undertaken at the appropriate time. The results of these efforts have been steadily disseminated not only through the special exhibition "Making of Minoru Betsuyaku" in 2021 but also through video distribution, research papers contributed by researchers, and academic presentations. Among the five Selected Research projects started in 2020 by the joint team, it is regrettable to note that Selected Research 1 ended in 2020, as it was a historically interesting topic to investigate the state of drama, music, and theater during the Occupation period (the results were made publicly available as a paper submission by the representative). Selected Research 2-5 have unique subjects that intersect the fields of theater, music, and film. The materials themselves range from materials from the Edo period to the Taisho and early Showa periods, including the former collection of Kurihara Shigekazu, sheet music archives of silent film musicians from the Hirano Collection, movie theater flyers related to the box office, and Sakagawa-ya's translator's picture books, all of which are unique to the Museum and are jointly utilized by principal investigators with specialist expertise and appropriate researchers.

In addition to database creation, cataloging, and other data organization, the results are being disseminated and shared in various ways, such as exhibitions, online seminars, screenings, symposiums, their online distribution, and publication of papers and monographs by researchers, and progress is being steadily made.

Encouragement Research basically encourages individual research by researchers affiliated with the Museum and is considered as an activity to support the development of future researchers rather than that intended for a public or social purpose. Considering the budget execution, however, there seems to be room for further consideration in terms of budget allocation, including publication subsidies, in the future.

In terms of collaboration and joint research in regard to the Center's projects, some researchers involved in joint research are currently affiliated with other institutions but were formerly assistants at the Museum or were involved in museum research. Furthermore, there are some cases where it is difficult to determine how the research results are reflected in the individual's performance.

It is essential to have expertise in academic research regarding the materials held by the Museum, and it is inevitable that the team members will be limited, to some extent, to conduct smooth and efficient research over a period of two years. Moreover, the fact that it is disseminated and published as an individual achievement in itself should be welcomed. However, given the mission of the Center as a "Collaborative Research Center," there may be room for further consideration of new partnerships and networks that will enable active participation by a wider variety of researchers both in Japan and abroad.

Overall, the academic community of the Museum, including the director and researchers, has been effectively functioning, supporting the active activities of the Center's projects, and the results have been generally properly executed and in line with expectations; we look forward to continued and enhanced development in the current term.

Zvika Serper (Professor Emeritus, Department of Theater, Faculty of the Arts, and Department of East Asian Studies, Faculty of the Humanities, Tel Aviv University)

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, managed by Tsubouchi Memorial Theatre Museum of Waseda University, has done an outstanding job in many aspects in terms of their activities during the most challenging period of the COVID-19 pandemic (2020-2022).

I. Encountering a Pandemic

The rapid adaptation to the complex situation caused by the pandemic by the collaborating research center and the invention of excellent new operational methods are noteworthy. The research team was able to continue the project and carry out research by using digital resources unavailable to the public in the Theatre Museum's collection and transitioning from face-to-face collaboration to online. The Collaborative Research Center responded immediately to the challenges posed by the pandemic and developed a platform for "Urgent Theme Research" to study its significant impact on their research subjects. The research team conducted a study of regulations during

the COVID-19 pandemic from 2020 to 2022 in Japanese theaters, museums, art galleries, and other institutions of the performing arts in Europe and the United States. This extremely interesting study represents various regulations of varying character and scope over the past three years, from a total ban on *Kabuki* performances in 2020 to a ban on *Kabuki* theater *kakegoe* shouting by the audience in 2022. Will the Collaborative Research Center promote research on the long-term changes and impact of COVID-19 on Japanese theater? What changes and developments will occur in the future as a result of the pandemic? In addition to the historical value of the material in the Theatre Museum's collection, the research conducted over the past three years will certainly contribute as a basis for important future studies.

II. Research Strategy

The Collaborative Research Center has created two effective and useful research platforms. The first platform includes major and special studies led by skilled researchers from the Theatre Museum and many other institutions in Japan. Here, I introduce some outstanding examples of such research projects. This platform has invented a highly unusual research theme that selects and focuses on a single element from a wider corpus of data. One of the research teams is conducting a basic study of the records of dance practice and cross-genre performances by Ito Michio from 1946 to 1948 at the Ernie Pyle Theater (Tokyo Takarazuka Theater) in the Senda Koreya collection. The study focuses on the extraordinary personality and activities of Ito Michio, the eldest brother of Senda Koreya, who was a central figure in the *Shingeki* movement. Ito Michio is an international dancer, choreographer, and director whose work influenced Irish poet and playwright W. B. Yeats and whose stage productions in Europe, Broadway in New York, and Hollywood in California have blended the East and West. A striking discovery is made between the American materials on the same subject juxtaposed with photographs from the Senda Koreya collection at the Theatre Museum. Another team studied comedian, director, and filmmaker Enoken (Enomoto Kenichi) within the framework of analysis of the complete works of the musician Kurihara Shigekazu, who also composed music for Enoken's performances and films. In addition, a team studied various aspects of silent films from the Taisho and early Showa periods by examining film flyers and other promotional materials. These studies involving highly unusual uses of data have produced interesting results.

The second platform, the "Encouragement Research Project," conducted by young researchers at the Theatre Museum, involved conducting basic research essential to the Theatre Museum's collections. The researchers examined materials from the Theatre Museum's collection, including those of playwrights and directors from the Little Theatre Movement, such as Ohta Shogo and Sato Makoto, and materials on *Shinpa* and *Joruri*, whose consistent focus on a single subject has laid a solid foundation for further research on people, subjects, and genres based on the Theatre Museum's collection. The combination of these two different research platforms has been effective and meaningful.

III. Refinement and Expansion of Digital Data

The recent refinement and expansion of various digital data in archives in various fields has been extremely beneficial. In the field of theater, the Japan Digital Theater Archives (JDTA), a cross-genre metadata study of the performing arts, is an extremely important resource for many future researchers of Japanese theater. Although there are obstacles, such as copyright issues, I hope to see this project realized in the near future. In the field of cinema, there is use of digitized silent films that are stored in the Museum. The research project not only corrected wrong editing of the digitized versions of the films, and completing missing parts with newly invented intertitles, but also added *benshi* narration and music in the style in which the films were created. This unique and creative study and its productions have made it possible to actually watch and study the essence of silent cinema.

IV. Synergies between archiving and research

The most important aspect of the activities undertaken by the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts is its synergy with the Theatre Museum as an archive. Its activities include researching existing data, integrating basic knowledge from various sources, developing innovative research, and carrying out the development of data for the Theatre Museum. The fulfillment of all the tasks from 2020 to 2022 proves that the establishment of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts in 2009 played the most crucial role in the work of the Theatre Museum and has made it the most essential resource for the future study of theater and film, energizing it as a distinctive institution for theatrical research.

編　集：長谷川理絵　鳩飼未緒
翻　訳：クリムゾンインタラクティブ プライベート リミテッド
発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」
早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点
拠点代表：岡室美奈子
早稲田大学演劇映像学連携研究拠点
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1　早稲田大学早稲田キャンパス6号館
TEL：03-5286-1829　URL：http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/

Edited by: Hasegawa Rie, Hatokai Mio
Translated by: Crimson Interactive Pvt. Ltd.
Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan
"Joint Usage / Research Center", Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University
Center Leader: Okamuro Minako
Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University
Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050
(+81)3-5286-1829　URL: http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/